



Title	東南アジアのラーマーヤナ : 2・タイ、カンボジア、ラオスの伝承
Author(s)	大野, 徹
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1994, 4, p. 255-308
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東南アジアのラーマーヤナ

2・タイ、カンボジア、ラオスの伝承

大 野 徹

この号では前号に引き続き、東南アジア各地に伝播しているラーマーヤナの内、タイ、カンボジア、ラオス三か国のラーマ物語の内容を紹介する。

1・ラーマキエン (Ramakien)

ラーマキエンはタイのラーマ物語である。サンスクリット語で「ラーマの栄光」または「ラーマの讃嘆」という意味を表わす。ラーマキエンは、チャクリ王朝の初代国王ラーマ一世（プラプッタヨットファ）によって編纂された韻文の物語で、抄訳ではあるが英語訳、ドイツ語訳が存在する。英訳、独訳によると、物語の梗概は次のようにになっている。

1. 太古、鉄囲山の頂にヒランタ・ヤクサ（ヒラン・ヤク）と言う羅刹がいた。イスヴァラ神（プラ・イスアン=自在天）の恩寵により法力を所有していた。彼は、地球を三つの部分に引き千切った。一つは閻浮提、一つは北狗留洲、残りの一つは西牛貨洲となった。困り果てた神々はカイラーサ山に集まり自在天の保護を求めた。自在天はヒランタ・ヤクサの暴虐から三つの世界の住人達を救済するため、ナラヤナ（プラ・ナライ=帝釈天）を派遣した。猪に化身して地界に潜入した帝釈天は、ヒランタを襲撃してこれを殺害した。帝釈天は乳海に戻り、ヴェーダ讃歌を歌った。すると、美しい蓮華が咲き、花弁の中央に美貌の男児が姿を現した。帝釈天はその男児を抱き上げ、カイラーサ山の自在天に献上した。自在天はその男児にナラヤナ王朝の始祖（世界で初めての閻浮提の王）アノーマタンになるよう命じた。都の造営を委ねられたインドラ（プラ・イン）は地上に降下して、四人の行者アチャンガヴィ、ユガグラ、ダハ、ヤガ

に会う。四人は、ドヴァラヴァティの森に都を築くよう勧める。ナラヤナ王朝の都は、行者四人の名前の頭文字を取って、ア・ユ・ダ・ヤと命名される。アユダヤの王に即位したアノーマタンはプラ・ナライの権化とみなされ、悪魔を退治するため法力と四種の武器（矢、三叉、矛、輪）とが与えられる。アノーマタンの妃マニケーサラに男児アジャパルが誕生。アジャパルの成人に伴い、父王アノーマタンは天界に帰る。アジャパルも王子ダサラタ（トサロット）を残して父王のもとに去る。

2. アジャパラ王の死に伴いその子トサロットがアユダヤ王に即位した。王にはカウスリヤ（コーサルヤー）、サムドラジャ（スミトラ）、カイヤケシ（カイケイー）という妃が3人いたが、跡継ぎが生れない。行者カライコートの協力で供犠（生贊祭）を催す。カライコートは、帝釈天がトサロットの子供として生まれ変わらよう、自在天に要請する。供犠の席上神の食べ物が入った盆から食べ物の一片をカラスがくわえて飛び去る。残りの食べ物を食べた王妃3人は男児を出産する。帝釈天はコーサルヤーの子プラ・ラーム、円盤はカイケイーの子バラタ（パロット）、竜と法螺貝はスミトラの子ラクシャナ（プラ・ラック）、矛はサトルド（サトル）に、それぞれ生れ替わる。

3. サハパティ・ブラフマが信者サハマリヴァン（マリーワン）のため閻浮提の南にランカー（ロンカー）島を創造するも、マリーワンは帝釈天を恐れて地下のパタル（冥界）へ逃走する。帝釈天はヴィシュヴァカルマに命じて無人のロンカー島に都ヴィジャランカーを造営させ、帝釈天の信者である羅刹チャトラバクタ（チャトラパク）を初代の王として即位させる。その後ロンカー王に即位した息子のプラスティヤ（プライサロテラート＝ラスティエン）には6人の息子ダサカンタ（トサカン）、ケンバカルナ（ケンバーカン）、ビベック（ビペーク）、ドゥシャナ（トゥート）、カラ（コーン）と娘サマナカーナができる。元ロンカー王マリーワンの地界パタルへの侵入に怒った地界の帝王カーラ・ナガ（カランガ）は、マリーワンを攻撃する。マリーワンはラスティエンに救援を要請する。ラスティエンに攻撃されたカランガは、娘カラアッギ（カーラ・アキ）をラスティエンに差し出す。ラスティエンとカーラ・アキとの間に生まれたのが、長子ダサカンタ（トサカン）である。老齢となったラスティエンは

王国を息子十人に分配する。トサカンはロンカーを貰い、そこの王となる。クベーラ（クペーラン）は飛車プシュパカを貰い、カラチャクラの王となる。サマンナカはジヴァ（チュハー）と結婚する。

4. カイラーサ山の自在天に仕えるナンダカ（ノントク）は、自在天の表敬に訪れる神々の足を洗うのが仕事だが、頭を殴られたり髪の毛を引張られたりする。神々の悪戯に耐えきれなくなったノントクは、自在天に訴える。自在天は、指差された者は皆即座に死ぬという魔力をノントクの指に与える。神々の大量死を憂えた帝釈天は、ノントクから魔力を取り上げるよう自在天に要請する。自在天の承諾を得た帝釈天は、天女に化身しノントクの眼前で舞いを舞い始める。一緒に踊ってくれれば望みをかなえてあげると天女に言われたノントクも、踊り始める。やがて踊り子は、人差指で自分の足を指す。ノントクもそれに倣う。ノントクの足は一瞬にして碎ける。死を予期したノントクは、帝釈天の奸計を詰る。帝釈天は、ノントクが頭十個、手は二十本の羅刹に生まれ変わるが、自分は頭が一つ、手は二本の人間に生まれ変わって汝を殺すと答える。こうした前世の因縁によって、ノントクは、トサカンに生まれ変わり、帝釈天はラーマ王子に生まれ変わる。自在天は、トサカンの弟ピペークに生まれ変わってラーマに協力するようヴェッスジュナンに命じ、無知の闇を照らし未来を洞察し得る能力を持つ魔法のガラスを与える。
5. トサカンの妻モントーの前身は、ヒマラヤ山で苦行生活を送っている行者4人から飲み残しの牛乳を貰って呑んでいたカエルである。ある時、淫乱な雌竜が肉欲の相手を求めて地上に出てきたものの、相手が見付からぬため蛇と交接する。庵へ帰る途中その姿を目撃した行者達が、竜の尾を叩く。恥をかかされて復讐心に燃える雌竜は、行者達が飲む牛乳に毒液を注入する。それを見ていたカエルが、行者への恩返しのため自ら毒入り牛乳の中に飛び込む。牛乳の中に浮んでいるカエルの死骸を見つけた行者達は、カエルの命を蘇らせて事情を聞き、醜いカエルを美しい女性に変身させる。モントーと命名され自在天に献上された女性は、自在天の妃ウマの侍女となる。
6. 自在天への表敬のため増長天がカイラーサ山に登る。折悪く自在天は不在。増長天の無駄骨を見て、2匹のオオヤモリが嘲笑する。激怒した増長天は身に

帯びていた蛇を投げつける。その威力でカイラーサ山が傾く。自在天から傾いた山を元に戻すよう命じられるものの、神々には直せない。渾身の力を込めて傾いた山を元に戻したトサカンに自在天は望みの褒美を取らせる。トサカンは自在天の妃ウマを所望する。引き渡されたウマを取り戻すため園丁に化けた帝釈天が、樹木を上下逆様に植樹する。それを見たトサカンが愚かな事をすると言つて笑う。怒れば体が熱くなるウマを連れて帰れば付き添つてゐる者まで燃え尽きてしまう。その方がもっと愚かだと園丁が言う。トサカンはウマを自在天に返し、代わりに侍女モントーを引き取る。

7. サケタ国（ゴータマ）のゴータマ（コーダム）王には嗣子がない。生贊祭を行なったところ、火炎の中から美しい女性カーラ・アチャナーが出現した。王妃となったカーラ・アチャナーに女児スヴァーハ（サワーハ）が生まれる。プラ・ラームへの奉仕者を作ろうとしていたアディトゥヤ（プラ・アーティト=太陽神）やプラ・インがカーラ・アチャナーの美貌に目を付ける。プラ・インとカーラ・アチャナーの間には男児カカシュビリ、太陽神とカーラ・アチャナーとの間にはスグリーブ（スクリープ）が、生れる。コーダム王は二人とも自分の子供だと思っていたが、母親の不貞を見ていたサワーハがその事実を父親に告げる。子供二人を川岸に連れて行ったコーダムは、自分の実子なら泳いで帰れ。他人の子供なら猿に変身せよと願掛けをして二人を水中に投げ込む。水中の二人は猿に変身し、森の中へ消え去る。妻の不貞を呪ったコーダムは、カーラ・アチャナーを石に変える。カーラ・アチャナーは、身の秘密を暴露した娘のサワーハに、片足で立ち霞以外には何も食えないよう呪詛する。この呪縛から解放される唯一の方法は、猿の子を生む事である。太陽神とプラ・インとは、猿になった兄弟二人のためキドキンに王城を築いてやる。カカシュは世界中の猿の王になる。
8. 海の女神マニメーカラの所有する秘宝をラーマスラ（ラームスン）が欲しがつて追いかける。その目の前をアルジュナ（プラ・アルチュン）が横切ったので、怒ったラームスンはアルチュンを掴まえ、須弥山めがけて放り投げる。傾いた須弥山を元に戻すよう自在天が三界の住人達に呼び掛ける。住民達は大蛇を須弥山に巻き付けて引っ張るが成功しない。協力を申し出たスクリープが大蛇の臍を押す。こそばゆさで大蛇が前身を硬直させた瞬間、兄のカカシュが須弥山

を持ち上げて真っ直ぐにする。自在天はカカシユに三鈷杵を与え、パーリー（パーリ=強い）と言う称号を授ける。スクリープには処女ターラーを渡そうとするが、スクリープが不在なので、パーリに送らせる。若い乙女を青年に送らせるのは、蜜蜂の前に花を置くようなものだと、帝釈天が反対する。パーリーは、ターラーには絶対に手を出さない。もし約束に背いたらプラ・ラームに射殺されてもよいと約束する。結局、パーリーはターラーの美貌に魅せられ、約束を忘れて自分のものにしてしまう。

9. ハスマーンは、パーリの異父姉妹サワーハの息子で、パーリの甥にあたる。母親カーラ・アチャナーの呪詛によって片足で立っていたサワーハを見た自在天が、風の神ヴァーユに命じて自分の力をサワーハの口に入れさせる。サワーハは白い猿を口から吐き出す。風の神はその猿にハスマーンと命名する。ハスマーンの耳飾りと輝く犬歯、白い巻き毛とは、プラ・ナライ以外の者には見えない。その特徴に気付いた者のために奉仕せよと、母親サワーハがハスマーンに教える。風の神に連れられて自在天の下に出頭したハスマーンは、変身の術と不死身の体とを保証される。自在天は、皮膚の垢からもう一匹の猿ジャンブバン（チョムブーパン=医術の達人）を創造しパーリに与える。
10. 自在天からウマの侍女モントーを下賜されたトサカンは、ロンカーハへの帰途、キトキンの王パーリの上空を飛翔する。モントーに一目惚れしたパーリは、他人の頭上を承諾もなしに飛び越えるとは怪しからんと難癖をつけて挑み掛かり、モントーを強奪する。その後モントーは、トサカンの師アンガドの執り成しでトサカンに返される。しかし、モントーは既に妊娠していた。トサカンの師アンガドは、彼女の胎内から胎児を取り出し山羊の胎内に入れる。出産の時に山羊の胎内から胎児を取り出し、嬰児に自分の名前アンガド（オンコット）を付けて実父のパーリに渡す。
11. パーリに敗れたトサカンは師アンガドの教えに従い犠牲祭を催す。その結果、トサカンは自分の肉体から魂を取り出して別の所に隠して置けるようになる。魂を抜いてあるためどんな武器を使ってもトカサンを殺すことはできない。不死身となったトサカンは、クーペーラン（毘沙門天）を攻撃して飛車プサポックを奪う。

12. アユダヤ王トサロットが嗣子を得るために催した生贊祭では火炎の中から神の食べ物が現れたが、その香りはロンカ一島まで漂って来た。トサカンの妻モントーがその食べ物を手に入れてくれるようトサカンにねだる。トサカンは、カラスに変身可能な羅刹カカナスラ（カカナスン）に取りに行かせる。カカナスンが持ち帰った神与の食べ物を食べたモントーは妊娠し女児を出産する。その女児はラクシュミの権化であった。女児は誕生直後「トサカンを殺せ、トサカンを殺せ」と叫ぶ。女児の産声はトサカン夫婦には聞こえなかったが、ピペーク以下の占い師達は、その女児がトサカン一族を破滅させる運命を背負っている事を見抜く。女児の処置を兄に一任されたピペークは、壺の中に女児を入れて川に流させる。壺は海の女神マニメーカラに守られ、行者となったジャナカ（チャノク）王の沐浴場にラクシュミ神の計らいで漂着する。沐浴に来たチャノクが漂着した壺に気付き、蓋を開けて女児を発見する。チャノクは壺を森の中へ運び穴を掘って埋める。十六年後、行者から王に復帰したチャノクは、自ら壺を掘り起こす。中には美しい少女が入っていた。壺の中から発見されたのでシーター（ナン・シーダー=壺）と命名、養女として育てる。
13. トサロット王の子プラ・ラームとその弟達は、行者ヴァシッタ、スヴァミトラの下で文武両道を修める。点された聖火の中に十二本投げ入れられた自在天の矢を兄弟四人が三本ずつ入手する。ラーム王子は、ブラマストラ、アグニヴァト、ブライヴァットの三本を手に入れる。行者達の神通力が自分を凌駕する事を恐れたトサカンは、行者の修業を妨害するためカラスに変身可能なカカナスンを派遣する。ヴァシッタ、スヴァミトラの両行者は、アユダヤ城に行き、ラーム、ラック両王子にカカナスン退治を要請する。カカナスンはラームの矢で倒れるも、その子マリシュ（マリート）はロンカ一へ逃走する。
14. チャノク王は、羅刹トリプラムを退治した弓を自在天から授かる。王は、その弓を持ち上げ得た人に成人したシーダーを嫁がせると声明。諸国の王たちが試みるが、成功する者はいない。ヴァシッタ、スヴァミトラ両行者がラーム王子をミティラへ案内する。王城の窓から見下ろしていたシーダーの目とラームの目とが合い、一目惚れする。ラームは見事に弓を持ち上げ、シーダーの婿となる。結婚式を挙げた二人は、トサロット王と共にアユダヤ国へ向う。

15. 斧を持つ半神半人のラマースン（ラーマスラ）は、海の女神マニメーカラが持つ珠玉を手に入れんとして追い掛けで失敗した事がある。斧を持つそのラマースンがラーム王子一行の行く手を遮り、ラームに一騎打ちを望む。敗れたラマースンは、祖父トリメガーが自在天に貰った弓をラームに進呈する。
16. 老齢になったトサロット王はアユダヤの王位をラーム王子に譲ろうとする。それを知った妃カイケーイーの侍女でせむしのクッチが、妃にラーム王子の追放と妃の子パロットの即位を教唆する。クッチは、かつてラーム王子にからかわれ、恨みに思っていた。トサロット王は天界が悪魔パドットダンタに侵略された時、天界に赴いて悪魔と戦ったことがある。その時、悪魔の放った矢がパロット王の乗った馬車に命中し、車軸が壊れた。カイケーイー妃が腕を車軸に差し込んだため、パロット王は事無きを得た。悪魔との戦いに勝った王は、カイケーイーに望みの褒美を取らせると約束した。カイケーイー妃がトサロット王に実子パロットの即位を要求したのは、その時の約束に基づく。約束の履行を迫られたトサロット王は、止むを得ずラーム王子を追放する。追放の期間は14年である。ラーム王子にシーダーとプラ・ラックとが同行する。トサロット王は失意の余り急逝する。
17. パロット王子は即位に同意しない。兄プラ・ラームに即位してもらうべきだと主張する。父トサロットの葬儀を済ませたパロットは、ラームのいる森へ向い、帰還を要請するが、断られる。パロットは兄の靴を貰い、それをラームの身代わりのとして玉座に置き、摂政として国を統治する。
18. ラーム一行は、羅刹サマナカーとチウハ夫妻の子クンバカシュ（クンバカート）が神通力を得るために修行しているゴータヴァリ川岸の森へやって来る。クンバカートの苦行に報いるため梵天が剣を投げ与える。果実を探しに森の中へきたプラ・ラックがその剣を拾い上げる。クンバカートとプラ・ラックの間で戦闘が始まり、クンバカートが首を撥ねられる。
19. ロンカー島の王トサカンは、森へ出かける時義弟のチウハに留守をさせる。チウハは不眠不休で王城を警護するが一週間後睡魔に襲われる。チウハは舌を長く伸ばして王城を覆い隠し、誰も侵入できないようにして熟睡する。帰城したトサカンが城へ入ろうとするが、暗闇に覆われ入口さえ見当たらない。トサ

カンはチャクラ（刀付きの円盤、回転円盤）を投げ付ける。チャクラは長く伸び切ったチウハの舌を切斷する。チウハは即死し、王城が姿を現す。トサカンは忠実な義弟の死を初めて知る。夫の急死を知ったサマナカーは、息子クンバカートの身の上を案じ、急いで森へ向う。森の中でラーム王子を見掛けて一目惚れしたサマナカーは、美女に変身して言い寄る。ラームは取り合わない。ラームが素気ないのはシーダーのせいだと知ったサマナカーは、羅刹の姿に戻りシーダーに襲いかかる。プラ・ラックが剣を抜いてサマナカーの四肢と耳鼻を切り落とす。逃げ出したサマナカーは、弟のコンとトゥートに事情を告げる。姉の復讐に向ったコンもその弟トゥートもラーム王子に討ち取られる。顔が三面あるトリシラも、返り討ちに会う。

20. 三人の死を知ったサマナカーはロンカー島へ逃走、トサカンに一部始終を訴える。トサカンは、シーダーを誘拐するためマリートに金色の鹿に変身してラーム、ラック兄弟を庵から誘い出すよう命じる。珍しい鹿の姿を目撃したシーダーは、捕えてくれるようラームにねだる。森の中へ逃げ込んだ鹿をラームは弓で射る。逃げ場を失ったマリートは、ラームの声を真似て助けを呼ぶ。マリートの悲鳴を聞いたシーダーは、ラームの身に危険が迫ったと思い込み、直ちに救援に向うようラックに促す。ラックは、シーダーを保護してくれるよう神々に祈願してラームの救援に出かける。そこへ行者に変装したトサカンが現れる。求愛を断られたトサカンは本性を現し、シーダーを捕えて飛車に押し込みロンカー島へと連れ去る。
21. シーダーを載せて空中を飛翔するトサカンの姿を見掛けた鳥のジャターユ（サターユ）が、シーダーを引き渡すよう要求するが拒否されて戦闘となる。自在天の指環を除いて何者にも傷付けられないと豪語するサターユの言葉を聞いたトサカンは、シーダーが指に嵌めている自在天の指輪を引き抜いてサターユに投げ付ける。傷ついたサターユは墜落、瀕死の重傷を負う。
22. シーダー捜索を開始したラーム兄弟は、シーダーがトサカンに誘拐された事を重傷のサターユに教えられる。サターユを葬った二人は、自在天の呪詛により上半身しか残っていない羅刹クンバラから、キドキンの森へ行って猿のパーティに会うよう勧められる。疲れた二人は木陰で休憩する。ラームは居眠りを始

め、ラックは周囲を見張る。樹上に白猿のハヌマンがいる。二人の素性を怪しむハヌマンは、枝を揺すぶる。眠りを妨げられたラックは、白猿目掛けて弓を射る。猿は飛んで来る矢を次々と受け止める。猿の超能力に気付いたラックは、ラームを起して事情を説明する。樹上を見上げたラームは、白猿の体の特徴に気付く。自分の特徴に気付かれた事を知ったハヌマンは、ラーム王子がプラ・ナライの権化であることを悟り、樹下に降りて臣従を誓う。

23. カイラーサ山の門番ナンダカは、花を摘みに来た自在天の妃に惚れて、気を引こうと花を投げる。憤慨した妃は、その事を自在天に訴える。自在天はナンダカがダラバ（トーラパー）という名の水牛に再生するよう呪詛する。水牛の王に生れかわったトーラパーは、身を守るために、生まれてくる牡牛を次々と殺す。洞窟の中で生れたダラビ（トーラピー）は、自分の足跡が父親のものと同じ大きさになるまで成長した時、父親トーラパーに挑戦して倒す。勝ち誇ったトーラピーは、神々に挑戦する。自在天にパーリを紹介されたトーラピーは、パーリと決闘するが決着がつかない。パーリは洞窟内での決闘を提案する。決闘の直前、パーリは弟スクリープに洞窟の入口で待機するよう伝える。洞窟内から流れ出る血が黒ければトーラピーのもので、色が薄ければ自分の血だ。薄い血が流れ出てきたら洞窟の入口を塞いで帰れと命じる。洞窟内での決闘は一週間続き、薄い血が流れ出る。それは水牛の血であったが、雨期のため雨水で薄められていたのである。薄い血を見たスクリープは、言われた通り洞窟の入口を塞いで帰る。パーリに殺されたトーラピーは、トサカンの弟コーンの息子マンカラカンタに生れ変わる。決闘には勝ったものの入口が塞がれている事に気付いたパーリは、スクリープが王座を横取りしたと勘違いし、王宮に戻ってスクリープを追放する。スクリープの話を聞いたラームは、スクリープを支援する旨約束する。

24. ラーム兄弟は、パーリの住むキトキンの森へスクリープと共に出掛ける。パーリとスクリープの一騎打ちは動きが早すぎてどちらがパーリなのか識別できない。ラームは、兄弟を識別するため自分の着衣の一部を裂いてスクリープの手首に巻き付ける。決闘が再開され、ラームはパーリを狙い撃つ。飛來した矢を手掴みにしたパーリは、狙撃手の顔を見てそれがプラ・ナライであることを知

る。全てを悟ったパーティは、ラームにオンコットの後事を託して死ぬ。スクリープは猿軍団を率いてシーダー捜索に参加する。

25. シーダーはロンカー島に幽閉されている事が判明する。ラームは、シーダーの居場所を確かめ連絡を取るため、ハヌマンをロンカー島へ派遣する。シーダーに渡す指輪とスカーフとをラームに託されたハヌマンは、羅刹に変身してロンカー城内に入るが、シーダーは見当たらない。小猿に変身して庭園に入ったところ、そこでシーダーの姿を見掛ける。トサカンが現われ、シーダーに求愛するが、拒否される。ハヌマンはラームの使いだと自己紹介し、証拠の品をシーダーに渡す。庭園を立ち去る前、ハヌマンは、トサカンお気に入りの樹木を引き抜く。警備の羅刹達がハヌマンに飛び掛かるが、全員殺される。トサカンの子イントロチット（インドラジット）が現われる。ハヌマンは捕えられ、トサカンの前に引っ立てられる。ハヌマンは死を望むと答える。油に浸した布がハヌマンの体に巻き付けられ、点火される。ハヌマンは王城の屋根の上に飛び上がり、次々と飛び移る。ロンカー城は一面火に包まれる。
26. トサカンは夢を見た。西から現われた黒いハゲワシと南から現われた白いハゲワシとが格闘し、敗れた黒鷹が墜落死する。別の夢を見た。ココヤシの殻に油を注ぎ、芯を入れ、掌の上に乗せたところ、女が駆け寄り点火した。燭台は燃え上がり、火が掌に燃え移った。トサカンは驚いて飛び起きた。占い師である弟のピペークを呼び、意味を尋ねる。黒鷹はトサカン、白鷹はラーム。従ってトサカンはラームに敗北する。ココヤシの燭台はロンカー王城、油はトサカン一族、芯は妃、点火した女はサマナカー、全てを焼き尽した炎はシーダーである。この災難から逃れる方法は、一つしかない。シーダーをラームに返還し、許しを乞うことだ。説明を聞いたトサカンは激怒し、ピペークをロンカーから追放する。ピペークはラームの下を訪れ軍師として仕える。
27. ロンカー島へ渡るには橋の建設が欠かせない。ラームは猿軍団に橋の建設を命じる。架橋工事をめぐって、白猿のハヌマンと黒猿のニラバッド（マハーチヨンプーの養子）の間で争いが起こる。ラームの裁定によって、ニラバッドはキトキンに帰りスクリープの摂政として猿軍団への食料補給の責任を持つ。ハヌマンは一週間以内に架橋工事を完成させる事になる。

28. 架橋の工事騒音はトサカンの耳にも届く。夜安眠できなくなったトサカンは、娘スヴァルナ・マッチャ（スワン・マッチャ）に、架橋工事用の礎石を取り除かせる。礎石の消滅に気付いたハヌマンが、潜水してスワン・マッチャの妨害を知り、復旧させる。ハヌマンは、美人のスワン・マッチャを口説く。トサカンの下に戻ったスワン・マッチャは、猿と羅刹の混血児マッチャヌを出産する。
29. プラ・ラーム率いる猿軍団は、完成した橋を渡ってロンカー島へと進撃する。ラームは、オンコットをトサカンの王宮に派遣し、最後通告を行なう。王宮にはオンコットの座席は設けられていない。オンコットは尾を伸ばし、それを丸めてトサカンの玉座と同じ高さにした後、その上に座り、シーダーの即時返還か、さもなくば即時開戦かの二者択一を迫る。トサカンは梵天から下賜された魔法の傘を広げる。太陽が遮られ、下界は暗黒の帳に包まれる。ロンカー王城は猿軍団の視界から消える。スクリープが天空に飛び上がり、魔法の傘を破壊する。下界は再び明るくなる。
30. トサカンは、冥界の王マヤラープ（マイヤラープ＝閻魔大王の子）に協力を求める。マヤラープは、自分の魂を取り出し蜂に変えてトリクタ山に隠しているため不死身である。しかも強力な粉末睡眠薬の持ち主で、粉吹き筒を使って相手に吹き掛け眠らせてしまう特技を持っている。マヤラープの接近に気付いたピペークは、猿軍団に警戒を呼び掛ける。ハヌマンは体を大きく変え、口の中にラームを隠す。マヤラープは山の上から吹き筒を使って眠り薬の粉末を辺り一面に吹き散らす。不眠不休で警戒に当っていた猿軍団は一匹残らず睡魔に襲われる。その間に、マヤラープはラームを抱えて冥界へ連れ去る。目覚めたピペークは、不可視のものを可視に変える水晶を用いてラームの行方を写し出す。ラームが冥界に拉致された事を知ったピペークは、ハヌマンを救援に向わせる。池一面に咲いている蓮華の一本を摘み取ったハヌマンは、茎の空洞を通って地底に向う。地底には、かつてハヌマンがトサカンの娘スワン・マッチャに生ませたマッチャヌがマヤラープの養子として仕えている。マッチャヌの協力で冥界に達したハヌマンは、椰子の木の間に隠された鉄の檻を発見する。ラームは檻の中で眠り込んでいる。トリクト山にいる蜂を掴まえて握り潰しマヤラープを抹殺したハヌマンは、ラームを抱えて地上へ戻る。

31. マヤラープの死を知ったトサカンは、弟クンパーカンにラーム打倒を命じる。

戦場に現れたクンパーカンにスクリープが対戦するが、全く歯が立たず組み敷かれてしまう。スクリープはハヌマンの助勢で危機を免れる。ロンカー城へ引上げたクンパーカンは、神与の槍モッカシャクティを取り出す。この槍は、使用前に、護摩を焚いて神に祈念し法力を得る必要がある。護摩の儀式が挙行されている所へ腐臭が漂い、カラスに腐肉を啄まれた犬の死骸が流れて来る。カラスはオンコット、犬はハヌマンであった。二人は祭壇を破壊する。翌朝神与の槍を携えて出陣したクンパーカンにプラ・ラックが応戦する。ラックは、飛来した神与の槍に刺され意識を失って倒れる。ハヌマンはピペークの指示でサバヤー山に向い、薬草を探って来る。プラ・ラックは薬草の効能で蘇生する。クンパーカンは体を大きく変えて、猿軍団の陣地の中を流れている川の上流に身を横たえる。水は涸れ、猿達は渴きに耐えられず死に始める。ハヌマンはピペークの指示で花売り娘に変身、クンパーカンに接近してその体を蹴り上げる。水は再び流れ始める。翌日クンパーカンの挑戦にラームが応戦する。クンパーカンはラームの放った矢に射抜かれ絶命する。

32. トサカンとモントーの間に生まれたインドラジット（イントロチット）は、自在天に授かったブラフマシュ、梵天に授かったナガパシュ、帝釈天に授かったヴィシュヌパナムという三種の武器の保持者である。この無敵の戦士に対しては、猿軍団は手も足も出ない。プラ・ラックもナガパシュ（蛇に変わる矢）に当たって倒れる。救援に駆けつけたハヌマンもプラ・ラームも倒れる。ピペークがヴェーダを読誦すると、ハヌマンとラームは意識を取り戻す。ラックを蘇生させるには、東勝身洲のアウド山に生えている薬草から製した膏薬が必要である。薬草の生えている場所は、チョンプーパン以外は知らない。しかもそこは回転円盤で警護されている。中へ入ろうとすれば、体がみじん切りにされてしまう。出入りできるのはハヌマンだけである。チョンプーパンに薬草の所在を教えて貰ったハヌマンが、薬草を持ち帰る。ラックは薬草のお陰で蘇生する。イントロチットは隠遁（不可視）の術を身に付けるため護摩を焚く。その最中、プラ・ラックが攻撃する。イントロチットはラックに襲われて死ぬが、首が胴体を離れると地上は大火災となり生物全てが焼け死ぬ事になっている。梵天の

もとに参上したオンコットが、イントロチットの首を受け止める花瓶を授かる。花瓶に生けられたイントロチットの首目掛けでラームが矢を放ち、首を灰にしてしまう。

33. トサカンとプラ・ラームとの一騎討ちが始まる。トサカンはラームに首を打ち落とされても腕を斬り落とされても再生する。トサカンの魂は肉体から取り出され、容器に収められて師のコーブット（ゴープトラ）に預けられている。その魂を打ち碎かない限り、トサカンは死ないとピペークがラームに教える。ハヌマンはオンコットと共にコーブット行者を訪れ、自分たちはプラ・ラームに冷遇されている。ロンカー王に仕えたい。紹介して欲しいと願い出る。承諾した行者から二人はトサカンの魂が入った容器を借り受ける。容器を城中に持ち込めばトサカンの魂は肉体に戻ってしまう。容器を持つオンコットを城門外に待機させたハヌマンは、トサカンの前で忠誠を誓う。誓いを証明するため、ハヌマンは戦場に出てプラ・ラックと戦う。翌日、ハヌマンは偽の容器を行者に返し、本物の容器はラームに渡す。ラームがプラフマストラの矢を放てばハヌマンが魂の容器を碎く事で合意する。翌日再開された戦闘でラームの放った矢はトサカンの胸を射抜く。次第に霞む目でトサカンはピペークを見る。同じ血を分けていながら何故兄を殺そうとするのか。後に残るモントーを宜しく頼む。トサカンの十個の口が次々と言葉を発する。十番目の口が物を言い終った時、ハヌマンは魂の容器を碎く。

34. ピペークの案内でシーダーがラームの前に現われる。ラームは、シーダーがトサカンから贈物を貰ったかどうか尋ねる。予想もしない質問に、シーダーは自らの貞節を証明するため火の神判を受けることにする。スクリープによって築かれた薪の山にラームの火矢が放たれる。火炎の中に歩み寄るシーダーの周りを金色の炎が包む。涼水が降り注ぎ、彼女は蓮華の上に迎えられる。シーダーは純潔であった。

35. アユダヤへ帰還したラームは、トサカンの征伐に功績のあった人々を表彰する。プラ・ラックにはコーンの所有地ローマガルが与えられ、パロットとサトルは皇太子に任じられる。スクリープはキトキンの王に、オンコットはその皇太子に、ピペークはロンカーの王に、ハヌマンはアユダヤの総督に、それぞれ

任じられる。

36. サマナカーの娘アドゥル（アトウン）が、一族の復讐のため、侍女に変身してシーダーに仕える。ラーム王の外出を狙って、アトウンは、シーダーにトサカンの肖像を描くよう要請する。スレートに描かれたトサカンの肖像の中に、アトウンが消え去る。肖像は、シーダーが消そうとしても消えない。ラームが帰還したので、シーダーはスレートを寝台の下に隠す。寝台に横たわったラームは、スレートの中の羅刹が発する熱気を体に感じる。不審に思ったラームは、ラックを呼んで調べさせる。スレートが見付かり、誰がトサカンの肖像を描いたのかを問い合わせられる。シーダーの告白を聞いたラームは、激怒しラックにシーダーの処刑を命じる。シーダーを森へ連れ出したものの、ラックはシーダーを殺す事ができない。プラ・イン（帝釈天）が、鹿の死骸を創造する。鹿の心臓を取り出したラックはそれを持ち帰り、シーダーを処刑したとラームに報告する。森の中に放置されたシーダーは、神の化身の水牛に導かれて、行者ヴァジムリガの庵に辿り着く。そこでシーダーは、ラーム王の嗣子マンクット（モンクット）を出産する。嬰児を行者に預けて水浴に出掛けたシーダーは、子猿を抱いたまま木から木へと飛び移る雌猿の姿を見掛ける。急いで庵に取って返したものの、行者は瞑想中である。シーダーは我が子を抱き上げて再び外出する。瞑想を終えた行者はモンクットの姿が消えていることに気付く。行者はスレートに嬰児の絵を描き、命を吹き込む。帰宅したシーダーはモンクットと瓜二つのラヴァ（ロプ）を見てモンクットと共に育てる。

37. モンクット兄弟が十歳になった時、森の中で放った矢が大木に当たって木を切り裂く。樹木は大音響を発して倒壊する。音はラーム王の居城にまで響く。不審に思った王は、生贊祭を催す。放たれた白馬には、この馬を捕えて乗った者は叛徒と見做すと言う警告文が括り付けられる。馬を見付けた兄弟二人は、警告文を無視して乗り回す。馬の前方をハヌマンが遮る。モンクットは弓でハヌマンを射る。倒れた猿を二人は縛り上げる。ハヌマンは縛られたまま王城へ帰り、ラーム王に報告する。軍隊が派遣され、捕えられたモンクットが連行される。庵へ逃げ帰ったロプは、母親シーダーから指輪を受けとり、都に潜入、水汲み女の手伝いをして水瓶の中に指輪を入れる。モンクットはその指環で縄

を切断、逃走する。追跡したラーム王とモンクット兄弟の間で戦闘が始まる。どちらの矢も相手の体を傷付けない。兄弟の母親の名前がシーダーであることを知ったラーム王は、庵を訪れシーダーに再会、王城へ戻るよう要請する。子供二人の将来を案じたシーダーは、モンクット、ロプ兄弟をラーム王に引き渡すが、自分は庵に止まる。

38. ラーム王は、急逝の虚報を伝えてシーダーを王城へ呼び寄せる。悲嘆に暮れるシーダーの眼前に、ラーム王が現れる。その瞬間、シーダーの足元の大地が割れ、彼女を呑み込む。カイラーサ山では神々の集いが持たれ、下界でのラームとシーダーの事柄が討議される。カイラーサ山に招かれたシーダーは、自在天の説得によりラームとの和解に同意する。

2. リアムケー (Reamker)

リアムケーは、カンボジアのラーマ物語である。プノンペンの仏教研究所 (l'institut bouddhique Phnompenh) に保存されている貝葉のフランス語訳版によると、全体は16分冊 (fascicule) に分れており、1から10までと、75から80までの番号が付けられている。形の上では11から74までが欠番になっているが、内容から判断すると、1から10までと75から80までとは同一版ではなく別々の版であると見られる。それは、1から10までがラーム、ラクス兄弟による悪魔カラスの退治に始まり、猿軍団の協力を得た兄弟がラーブを攻撃、インドラジットを殺されたラーブが鉄囲山の外にいるムーラパラムの所へ逃走する場面までが述べられているのに対し、75から80までは、羅刹の策略でラーブの肖像画を描かされたシーターがラームに追放され、行者の庵で出産した子供二人を通じてラームと再会するが、和解を求めるラームの要請を断って地下に姿を消すまでが描写されており、ラーブの戦死を中心とする欠落部分はさほど多くないからである。従って、1から10までと75から80までとは、その中間の11から74までによって繋がれる同一の版である可能性は殆ど無い。仮に11から74までが同一版の散逸だとすれば、散逸部分の内容はラーブの死からラームの一行のアユタヤ帰還までの僅かな出来事を1から10までの6.5倍にも相当する膨大な紙幅を使って微に入り細を穿つ

て説明しているということになろう。この点については、英語訳版の場合も同じである。なお、クメール語の原版については、仏教研究所所蔵の貝葉以外に、パリの国立図書館 (bibliothèque nationale de Paris) 所蔵の写本とタイ文字印刷によるクメール語韻文とが知られている。仏訳および英訳されたカンボジアのラーマ物語の梗概は、次のようになっている。

1. 行者ビスヴァミトルの犠牲祭の祭壇にカラスに変身した羅刹カカヌースルが現われ、騒ぎ立てて妨害する。ビスヴァミトルはダサラト王の王子ラームとラクスマの二人にカカヌースルの退治を要請する。ラームは弓でカカヌースルを射殺す。
2. ミティラー国王ジャナクは、6月吉日、始耕祭を行なう。ヤムナー川の岸辺まで耕した時、筏の上の蓮華の中に金色の少女を発見する。王は少女を連れ帰り、シーターと名付けて養育する。
3. シーターは、天女に勝る美しい乙女に成長する。ジャナク王は、法力で弓と矢を創造し、その弓を持ち上げ得た者にシーターを嫁がせると誓約する。諸国の王が集い力を競うが、誰も弓を持ち上げ得ない。ビスヴァミトルの案内でラームとラクスマの二王子がミティラーにやって来る。ラーム王子が神々の祝福を受けて弓を持ち上げる。ジャナク王は吉日を選びラームとシーターの結婚式を行なう。ラームの父ダサラト王やラームの弟ビルト、ストルトの両王子も結婚式に参列する。
4. 挙式を済ませたラーム夫妻は、故郷のアイユディヤーに向う。途中、ヤーマティクの子である羅刹のラーマ・パラマスールと出会う。ラーマ・パラマスールは、斧と弓矢を所持している。なぜ自分と同じ名前をラーム王子が持っているのかと尋ねる。ラーム王子は、余はナーラーイであると答える。汝がビスヌの流れを汲むナーラーイであり、ハリであると言うのであれば、この余の弓を持ち上げてみよ。それができねば、足下に跪き両手を突いて謝れ。さすれば許してやってもよいと言う。ラームは左手だけで軽々と弓を持ち上げ、アギヴァスの矢を番えてパラマスールを狙う。パラマスールは震え上がり、命乞いをする。
5. 年取ったダサラト王は、アイユディヤの王位を長子ラームに譲る準備をする。

妃の一人カイケーシーが異議を申し立てる。ダサラト王がアーディトヤ・スリヤー王と戦った時、王は、アイユディヤーの王位を将来カイケーシーの子ビルトに譲るとカイケーシーに約束した。ビルトを新しい国王にすべきだと言う。ダサラト王は、王位は年長の王子に譲るのが古来からのしきたりだと言って断るが、カイケーシーは約束の履行を迫る。王は、王国を二分して王子二人に分割譲渡する旨提案するが、カイケーシーは納得しない。ラーム夫妻とラクスム王子の三人を十四年間森へ追放するよう要求する。

6. カイケーシーの横車に憤慨したラクスムが妃を殺そうとするが、ラームに制止される。シーターもラームに同行を求める。ラーム夫妻とラクスムの三人は、王城を出て森へ向う。ラームがナーラーイであることを承知している森の主クーカンが食べ物を進呈する。眠りの女神ニドラーーデービーが、ラクスム王子の願いに応えて、14年間何も食べなくても飢えることがなく、睡眠を取らなくても平気でいられるよう保証する。
7. 三人はカーラティー川を筏で渡り、チトラクート山に至る。ラクスムが庵を作る。
8. アイユディヤ国王ダサラト死去。行者ヴァシット、祖父の下を訪れているビルトに直ちに帰国して即位するよう要請する。ビルトは、弟ストルトと共に帰国して父の葬儀を行なうが、王位を継ぐ気持はない。葬儀を済ませたビルトは大軍を率いて兄一行の後を追う。ビルト来訪の真意を疑うラクスムはビルトを攻撃しようとするがラームに制止される。ビルト兄弟は父の死をラーム王子に伝え、王位への即位を要請する。ラームは父が約束を破ったことにならないよう要請を拒否し、代りに金のサンダルを渡す。ビルト兄弟、アイユディヤに帰る。
9. 羅刹のスーラパナカーが、ラーム王子に懸想して夫婦になりたいと望む。美女に変身したスーラパナカーはラーム王子の前に現われ、自分はランカーを支配する羅刹王ラーブの妹である。クンバカールも占星家ビベックも、自分の兄である。願わくば自分をラーム王子の側室にして欲しいと言い寄る。ラームは、自分は既婚者だが弟は独身だ。弟の方があなたには相応しいと言って断る。スーラパナカーは、今度はラクスムを口説く。自分には側室は不要だと言ってラク

スムも断り、ラーマの所へ行くよう勧める。一度断られたからと行って諦めることはない。もう一度話してみるがよいとラームは言う。スーラパナカーはラクスムに、あなたが私を受け入れてくれなくても私はあなたを自分の夫にしますと強引に迫る。激怒したラクスムは剣を抜いてスーラパナカーの腕を切り落とし、頭髪を剃り落とす。悲鳴を聞いたスーラパナカーの兄弟カルとドゥースおよびカルの子トリームク等が復讐に現われるが、ラームによって射殺される。

10. スーラパナカーは、ランカー島へ渡り、カル、ドゥース、トリームクの死を羅刹王ラーブに報告する。十頭の持主ラーブはスーラパナカーの丸刈り頭に気付き、犯人の名前を問い合わせて、一部始終を知る。スーラパナカーはシーターの美しさを語り、ラーブの妃にするよう勧める。ラーブは配下を呼び集め、策略でシーターを捕えるよう命じる。
11. ラーブは、カーカナスールの子マハーリークに、鹿に変身してラーマを庵から誘い出すよう命じる。金色の鹿に変身したマハーリークの姿を目撃したシーターは、その毛皮が欲しいとラーマにせがむ。ラームは鹿が羅刹の化身であることを見抜くが、シータにせがまれて鹿の後を追う。ラームに矢を射られた鹿は、断末魔の悲鳴を挙げる。それは、ラクスムに救助を求めるラームの声を真似たものでもあった。その悲鳴を聞いたシーターは、ラクスムにラームの救援に行くよう促す。兄からシーターの警護を命ぜられていたラクスムは、悲鳴は羅刹の策略だと言って一旦は断わる。しかし、汝が行かなければ自分が行くと言うシーターの言葉に、大地の神、森の神にシーターの身の安全を託して出かける。
12. 婆羅門に変装したラーブがシーターのいる庵にやって来る。シーターの美しさを褒めたたえるラーブに不審の念を抱いたシーターは、自分はミティラー国王の娘であり、アイユディヤー王国の統治者であるハリーの妃だと告げる。本性を現わしたラーブは、余はランカー国王ラーブなり、汝を余の妃にすると言い放つと、シーターを捕えて天空高く飛び上がる。ランカーへ拉致される途中、シーターは、神々に祈り、出会ったシラサギに自分の苦境をラームに伝えるよう依頼する。
13. シーターを連れて空中を飛翔するラーブの姿を見掛けたガルーダの王ジャター

ユが、シーター救出のためラーブに襲いかかる。ジャターユはラーム王子の父ダサラト王の知合いである。強敵の出現にラーブはシーターの指環を抜き取ってジャターユに投げ付ける。それは神通力を帯びたシヴァ神の指環であった。ジャターユは翼を切断され地上に墜落する。ランカーに到着したラーブは、シーターをアソカ樹林に幽閉する。

14. 庵に帰ってシーターの行方不明を知ったラーム、ラクスマ兄弟は、捜索を始める。瀕死の重傷を追ったジャターユから、二人は、シーターがランカー王ラーブに拉致された事を知る。
15. ヘーマバーンの森に、水牛王の息子ドゥービーがいる。水牛王は自分の地位を守るために、生まれてくる自分の息子たちを次々と殺す。母親に保護されて巨大な体に成長したドゥービーは、父親を殺し、ヘーマバーンの山を支配する。インドラ神は、ドゥービーに猿の王国カースキンの頭領バーリーと闘う事を勧める。決着が付かないため、バーリーは、洞窟内での決闘を提案する。洞窟の中ではドゥービーの巨体が不自由になるからである。バーリーは、決闘の後黒い血が流れ出ればそれは水牛の血で、鮮明な血が流れ出ればそれは自分の血だ。流れ出てくる血が鮮明であった場合には入口を封鎖するよう、弟のスグリーブに命じる。洞窟内での格闘ではバーリーが勝利を得るが、六欲天の神々がバーリーの勝利を祝って投げた数多の花のせいで、ドゥービーの黒い血が鮮やかな色に変る。鮮明な血が流れ出てきたのを見たスグリーブは、兄が死んだと思い込み、命ぜられた通り入口を塞いでカースキンに帰る。塞がれた入口の岩を水牛の角で開けて外へ出たバーリーは、弟が自分の王位を奪ったと激怒する。王宮に戻ったバーリーは、弟の釈明には耳を貸さず、殴る蹴るの暴行を加える。半殺しの状態になったスグリーブは、行者マタンの山に逃れる。ドゥービーの血で行者の山を汚したバーリーは、マタンの山へは入れない。瀕死のバーリーに仕えたのは、甥のハヌマーンだけであった。
16. 森の中を渉猟していたラーム、ラクスマ兄弟は、1本のマンゴーの木の下で休息する。ラームは疲労のあまりラクスマの膝枕で眠り込む。太陽が静止した。この異常な動きを不審に思ったスグリーブが、ハヌマーンに様子を探らせる。マンゴーの木の上に飛来したハヌマーンは、樹下で居眠りしているラーム兄弟

を見て、この人こそ我が主君であり、スクリープの苦しみを癒してくれる人であることを見抜く。ハヌマーンは、葉を千切って落し始める。舞い落ちて来る木の葉を見て、ラクスムが樹上を見上げると、白猿が盛んに葉を落としている。弓を取上げて射ようすると、ラームが目を覚ます。見上げると、両耳に耳飾りをした美しい白猿がいる。ラームがラクスムを制すると、猿は木の下に降りて来て、ラームに敬礼をした後、我は風の神の子なり。名前はハヌマーンと申す。汝の耳飾りに気付いた人こそ汝の主君なりと母親に聞かされた。あなたが私の主君です。猿王兄弟の弟スクリープの命令でここへ来ましたと述べる。

17. ラクスムが汲んできた水をラームが飲むと、塩辛い。水源を辿ると、水は大きな山から流れ出ている。それはスクリープの涙であった。スクリープはバーリーとの兄弟相剋を説明し、ラームの支援を求める。両者の間に協力関係が成り立つ。
18. カースキンの森へ赴いたスクリープは、バーリーと決闘する。両者が酷似しているため識別できない。ラクスムが花環をつくってスクリープの頭に被せる。ラームがバーリーを弓で射る。バーリーは矢を掴み、誰がこの矢を射たのかと詰問する。射手がヴィシュヌであることを知ったバーリーは、某は何の罪も犯して居ない。何故に某を射たのかと尋ねる。汝はスクリープの妻となる予定のターラーを横取りした。余がスクリープに加担したのはそのためだ。これは汝への罰だ。命乞いをすれば助命するとラームは答える。助命嘆願を潔しとしないバーリーは、死を選ぶ。
19. バーリーの死に伴い、スクリープがカースキンの猿王に即位する。ラームは、ハヌマーンに猿軍団の指揮を、アンガッドに特殊部隊の指揮を委ねる。ランカーに赴いてシーターを捜索するようラームに命ぜられたハヌマーンは、証拠の品としてラームの指環を携えランカーへ飛ぶ。ランカー城塞に侵入したハヌマーンは、ラーブの寝室に入り込み、熟睡中のラーブ、マンドーギリー夫妻の頭髪を結び合わせて、マンドーギリーがラーブの頭を左手で三回叩かない限り縛れが解けないように呪いを掛ける。
20. 侍女二人の会話からシーターがアソカ樹園にいる事を知ったハヌマーンは、そこでシーターに出会い、指環を渡してラームの使いである事を告げる。アソ

カ園を荒し羅刹兵士を殺したハヌマーンは、ラーブの子インドラジットに捕縛され、ラーブの前に連行される。ラーブに死を言い渡されたハヌマーンは、自分を殺すには体を布でくるみ焼き殺せと言う。体に点火されたハヌマーンは屋上に飛び上がり、駆け回ってランカー市全域を延焼させる。

21. スクリープの提案で別の猿王マハージャンブーがラームの軍勢に加わる。マハージャンブーは自分の代理としてニルとナルの2武将に協力させる。ランカー島へ渡るため土手道が築かれる。怒った魚達が工事を妨害する。ラームは矢を海中に射込み、海を干上がらせる。海神が姿を現わし、魚達に土手道を復旧させる。ラームの率いる猿軍団はランカー島へ渡る。
22. 猿軍団の接近を知ったラーブは、弟ビベックに戦況を占わせる。結果は凶と出る。怒ったラーブは、ビベックを追放する。ビベックは、ラーマの軍勢に加わる。ラーブがシーターを拉致した事は窃盗に等しい。このままだと夥しい羅刹が虐殺され、ランカーが滅亡する恐れがあるとマンドーギリーに言われたラーブは、妻を叱責する。
23. 猿軍団と羅刹軍団との戦闘が始まる。両軍の武将ルカラとラッカセンとが一騎打ちをして相討ちとなる。ルカラの死をハヌマンの死と勘違いしたラーブは、祝宴を催し、勝利の傘を広げる。傘はラームの矢で吹き飛ばされる。
24. ラームは、ランカーからの立ち退きをラーブに要求するためアンガッドを派遣する。アンガッドはラーブと同じ高さの座を要求する。ラーブはクンバカルナと同じ高さになることを認める。アンガッドは承知しない。インドラジットと同じ高さまで譲歩する。アンガッドはそれでも納得しない。自分の尾を環状に丸めてラーブと対等の高さにして座る。アンガッドの実母マンドーギリーを玉座に呼び寄せたラーブは、汝の母の夫たる余に対して何が故に汝は敬意を払わないのかと非難する。マンドーギリーの姿を見たアンガッドは、私は貴女のおなかに宿った。そのご恩は忘れませんと言って、左手を腹の高さまで持ち上げて敬意を現す。しかし、シーターを誘惑したラーブに対しては、敬意を表することはせず、空中高く飛び上がって去る。
25. ラーブは、ラームの軍勢を撃破するため弟クンバカルナを出陣させる。クンバカルナは、バーリー殺害の科でラームを非難する。ラクスマとクンバカルナ

との一騎討ちが始まり、ラクスムが負傷する。ハヌマンがヘーマバン山へ飛んで薬草を持ち帰り、ラクスムを治療する。戦闘が再開され、ケンバカルナはラクスムに討ち取られる。

26. ケンバカルナを失ったラーブは、息子インドラジットを出陣させる。ハヌマン、ラクスム、アンガッドの3人が迎撃するが、いずれもインドラジットの矢に苦戦する。インドラジットの矢には梵天の呪文が掛かっており、竜の網に一変して敵を捕縛する。網に絡まって動きが取れないラクスムを助けるため、梵天が竜の宿敵、迦楼羅（ガルーダ）に出動を要請する。ラクスムの命助かる。
27. ラーブ、息子5人、腹心の武将5人を次々に出陣させるが、全員ラームに敗北する。インドラジットとラティカイはラクスムに殺され、マホーダルはアンガッドに、トリーシールはハヌマーンに殺される。自ら出撃したラーブ、ラームの軍勢に蛇毒を吹きかける。ハヌマーンがそれを無効にする。ラーブ、ムーラパラムに援軍を要請する。
28. ラーブの親類である地下の鬼アートゥルが人間に化身してシーター妃の侍女の中に紛れ込む。アートゥルは、ラーム王の外出を見計らってシーターにラーブの肖像画を描くよう要請する。描き終った頃、ラームが帰城する。シーターは寝台の下に肖像画を隠す。ラクスムか肖像画を発見する。シーターは自分が描いた事を認める。激怒したラームは、ラクスムにシーターの処刑を命じる。ラクスムはシーターを森へ連れ出すが、シーターが懷妊している事を知り処刑に踏み切れない。ラクスムの振り下ろす剣は、その都度、花輪に一変する。シーターと別れたラクスムの前に、鹿の死骸が横たわっている。その鹿は、インドラ神が創造したものである。ラクスムは鹿の心臓を抉り取り、シーターの心臓だと言ってラームに差し出す。
29. シーター、インドラ神の助けで行者ヴァジャブリットの庵に辿り着く。庵でシーターは男児ラームラクスンを出産する。嬰児を行者に任せたシーター、水浴に向かうが、猿の警告で嬰児を連れに帰る。嬰児がいない事に気付いた行者、黒板に嬰児の絵を描き、命を与えて代りの嬰児ジャプラクスンを創造する。庵に帰ったシーターは身代りの嬰児も自分の子として育てる。行者は少年2人を文武両道に亘って教育する。

32. 騒々しい音がする。ラーム王は騒音の原因を占星師に尋ねる。目に見えぬ敵を求めて、馬が放される。その後をハヌマンが尾行する。馬は森の中でシーターの子二人に捕まる。二人は馬を乗り回す。二人を捕まえようとしたハヌマンは逆に捕えられ、顔に伝言を書いて放される。縛り上げられた縄を誰も解く事ができない。帰城したハヌマンの縄をラームが解き、少年二人を連行するよう命じる。
33. ラームの弟ビルトとストルトとが少年二人に呼び掛けるが、二人は名乗る事さえ拒否し、ビルト、ストルトと戦う。少年二人の内、ラームラクスンが捕縛される。ジャプラクスンは逃亡する。一部始終を聞いたシーターは、ジャプラクスンに指環を渡し、弟の搜索に送り出す。捕えられ足枷を嵌められたラームラクスンの処刑が迫る。インドラ神の使いランバーが水鏡をラームラクスンに渡す。中には、ジャプラクスンの手でシーターの指環が入れてある。ラムラクスンは指環で足枷を切断し脱出する。
34. 少年二人は追跡する兵士たちと戦う。ラームの矢は少年たちを傷付ける事がない。少年たちが放った矢もラームに害を与えることはない。ラームは少年二人が自分と血縁関係にあるのであれば、放った矢が食物に変るよう祈願して矢を射る。矢は食物に変る。ラーム王、少年二人に素性を聞く。ラームラクスン、母はシーターだと明かす。ラーム、シーターの所へ案内するよう要求する。シーターと再会したラーム、王宮へ同行するよう求める。シーターは、ラームの要求を拒否する。火の神判による潔白の証明にも拘らず自分を疑ったラームを、シーターは非難する。ラーム、少年二人を連れ帰る。二人は、母親にアイユディヤに来るよう要請する。シーターは、ラームが死ねばその葬儀には参列すると答える。ラーム王、葬儀の準備をして自分が死んだとシーターに伝えさせる。葬儀に参列したシーター、ラームの顔を見てその場を走り去る。ラーム、追い掛ける。逃亡できぬことを悟ったシーター、大地が裂けて自分を受け入れるよう、龍の国へ赴くことができるよう、大地に祈願する。竜王はシーターの受け入れを承知する。ラーム、手紙を矢に付けて放つ。

3. パラック・パラム (Phra Lak Phra Lam)

ラオスには2種類のラーマ物語が現存しているが、パラック・パラムは、その中の一つである。その内容は次のようにになっている。

1. 現劫の始め、一組の梵天がアカニタ天（有頂天）から地上に降下した。二人は土を食べたため体が重くなり、天界へ帰れなくなった。二人の間には百一人の子供が生まれ、インタパタナコンが出現した。子供達百人は閻浮提に行って支配したが、インタパタナコンは末子のタッパラメンスワンが統治した。タッパラメンスワンが年取った時、インタパタナコンの王位は末子ヴィルラハ（增長天）に譲渡された。ヴィルラハの兄タッタラッタ（持国天）は北方へ去りパンパオに住みついた。タッタラッタはメコン川の主である七頭の竜の勧めで都を対岸のチャンタナブリ・シサッタナクに遷した。
2. 有頂天のマハーブラフマー（大梵天）が死んで下界に転生する途中、四王天を通過した。大梵天は地上降下前に魂の改造を天に勧められたが断る。大梵天はインタパタナコン郊外の百姓クン・ナ・ルオンの家に、丸い体と小さな頭、短い四肢を持つ不具者タオ・ルンルとして生れる。不具の子に同情したインドラ（帝釈天）がタオ・ルンルの前に現われ、仏教の教義に関する謎を尋ねる。一仏、二法、三受、四諦、五戒、六識、七菩提、八正道と言う正解ができたので、帝釈天はタオ・ルンルを四王天へ連れ戻す。魂を改造されたタオ・ルンルの前身大梵天は、七人の天によって帝釈天の所へ案内される。彼はそこで帝釈天と同じ美男子に改造される。しかし帝釈天は、大梵天が来世は高慢で、強欲で、強力な存在になると予言する。彼は不死身とされ、いかなる武器によっても殺される事はない。唯一の例外はケネヴァシラベットの矢だが、それは海底にある。
3. こうして大梵天は、不具者としての短い人生の後、インタパタナコンの王ヴィルラハ（增長天）の子ラッファナスワン=タオ・ハップ・ブラ・ナスオンに生れ変わる。ラッファナスワンは超能力の持主で、天界の弓を所持している。三歳の時、彼はチャンタブリ・シサッタナクへ飛んで、自分とは従姉妹にあたる持国天の娘ナン・チャンターを誘拐する。ナン・チャンターを妻としたラッファ

ナスワンは、（1）年長の従姉妹とは結婚できない。（2）嫁を貰う時は結納を納めると言うラオ族の慣習に背いた。

4. ラッファナスワンの蛮行を案じた帝釈天は、占星術に通じた天人 (Thevabut) を下界に遣わし再生させる。占星師はラッファナスワンの弟ピクピー (Vibhisan) として生まれる。続いてその弟インタシー (インドラジット) も生れる。
5. 嗣子の居ないタッタラッタ王の願いが叶えられ、天人二人が下界に派遣される。二人はタッタラッタ王の王子パラク (Phra Lak)、パラム (Phra Lam) として生れ変わる。パラク、パラム兄弟は1歳になった時、インタパタナコンへ出掛けてラッファナスワンの手から姉のナン・チャンタを取り返す。三か月間昏睡状態にあったラッファナスワンは意識を取り戻すと、パラク、パラムの後を追う。何度も戦闘が繰り返された揚句、ラッファナスワンはバンムク川の河口で降参する。パラク、パラム兄弟はラッファナスワンが提供した舟でチャンタブリ・シサッタナクに帰還する。
6. インタパタナコンへの遠征の結果、パラムはナン・シピンパと、パラクはナン・シカンヤと結婚する。パラムはチャンタブリ・シサッタナクの王に即位し、パラクは太守に就任する。二人は、インタパタナコンへの遠征途中で結婚した女性14人のための結納として、武将を派遣し駿馬マニカップを贈る。
7. ラッファナスワンは武将二人をチャンタブリ・シサッタナクへ派遣して、ナン・チャンタを貰い受けるための結納を贈り、パラムの要求を満たす。ラッファナスワンがナン・チャンタをインタパタナコンへ連れ帰った時、全員出迎えるが、祖父タッパラメンスワンだけは顔を見せない。自分より年長の従姉妹ナン・チャンタをラッファナスワンが妻に迎えた事はラオ族社会の規範を破った事になるからで、祖父にはそれが許せない。ラッファナスワンは妻子を伴いユカイトン山 (持双山) に移り住む。祖父タッパラメンスワンもインタパタナコンを去る。
8. インタパタナコンからランカーへとやって来たラッファナスワンは、帝釈天の妃ナン・スサダを誘惑する。ナン・スサダは憤慨し、ラッファナスワンの娘ナン・シーダーに生れ変わる。ナン・シーダーは誕生直後父親の死を予言した

ことから捨子にされる。シーダーは聖者の庵に辿り着き、その養女となる。

9. ナン・シーダーの住む島をラッファナスワンが訪れる。ラッファナスワンが聖者の弓を持ち上げようとするができない。聖者はナン・シーダーと瓜二つの女性ナン・スッドーを創造して、ラッファナスワンに渡す。ランカーへの帰途、ナン・スッドーは一月一人ずつの割合で息子九人を生む。
10. ラッファナスワンが島を去った後、チャンタナブリ・シサッタナクからパラムがやって来る。パラムは弓を持ち上げ、ナン・シーダーと結婚する。パラムがシーダーを娶った事を知ったラッファナスワンは、シーダーを誘拐するため虫や鳥、獣、蛇その他多くの魅惑的な物を創造して、パラムをおびき出す。結局、金の鹿を作り出してシーダーの誘惑に成功する。しかし、ラッファナスワンがシーダーの体に触れると体が熱くなる。ラッファナスワンはシーダーを石像に変えて連れ去る。シーダーをランカーへ拉致したラッファナスワンは、城外の離宮に幽閉する。
11. マニカップ馬の魔力に圧倒されたラッファナスワンは、シーダーを同行してパラムの住む島を訪れる。ランカーへの帰途、ラッファナスワンは、パラムの同盟者である神鳥プラヤクットと遭遇して交戦する。ファッラナスワンは、シーダーの指環で鳥の翼を切り落として、ランカーへ帰る。傷ついた鳥をパラムが手当する。
12. パラムは軍を編成してランカー島を攻撃しようと決意するが、ニコット果を食べた事から猿に変身する。行者の妻が日の神との密通によって、サンキップ(スグリープ)、プラリチャン(ヴァーリン)と言う息子二人を生む。二人が実子かどうか疑った行者は、水による神判を行なう。子供二人は猿の国カシに去り、そこの王及び総督となる。二人の姉ナン・ベンシーもニコット果を食べて猿に変身する。ナン・ベンシーは、同じく猿になっていたパラムと交尾して、一子フーラマン(ハヌマン)を生む。
13. 猿の王サンキップは、水牛トーラピーとの格闘の際に生じた誤解が基で、弟プラリチャンを王国から追放する。人間の姿に戻ったパラムは、追放中のプラリチャンと遭遇し、リチャンが兄サンキップを殺して猿の王座を獲得するのに協力する。夫サンキップのために戦ったナン・コッタラットは、プラリチャン

のせいで視力を失う。その目を治したパラムがコッタラットと同棲する。二人の間にタオクアン・タオファが生まれる。

14. カシ王国で1アッコーペーニの軍勢を編成したパラムは、リチャンと共にインタパタナコンへ向う。リチャンは閻浮提を隈なく巡り、インタパタナコンへの派遣使節を募る。タオクアン・タオファが協力を申し出る。フーラマンに伴われたタオクアン・タオファは、インタパタナコンからランカーへと飛ぶ。ランカーでナン・シーダーに会いパラムから預かって来た指環を渡した二人は、ラッファナスワンの王宮に至る。二人を殺そうとラッファナスワンの部下たちが、油に浸したぼろ布で二人の体を包み火を付ける。二人は王城を焼き払った後、インタパタナコンに戻る。
15. パラムは、インタパタナコンで新たに八アッコーペーニの軍勢を編成し、チャントナブリ・シサッタナクの息子や甥等八人の王子を加えて、フーラマンとタオクアン・タオファが見付けておいた海中の浅瀬に向う。ナン・シーダーを返還するよう勧告した事からラッファナスワンの怒りを買いランカーから追放されたピクピ、インタシ、セッタクンマン等がパラムの軍勢に加わる。フーラマンとその仲間タオクアン・タオファ、サッタプラヤ、カラハプラヤは、パラムの軍勢を騙すため橋のように長く伸ばしていたケン・シヴハの舌を切り落とす。
16. 浅瀬を徒歩で渡る計画は、架橋計画に取って替えられる。架橋工事はフーラマンとその三人の仲間が引受ける。橋は地下の帝王プラヤ・ナクの娘四人によって壊されるが、その四人は架橋工事担当者四人とそれぞれ性的な関係を持ち、男子を一人ずつ生む。
17. ランカー島へ渡ったパラムは、ナン・シーダーを引き渡すようラッファナスワンに警告の矢を放つ。ラッファナスワンの武将プラヤチャンはバナナの幹をシーダーの死体に見せ掛けてパラムの駐屯地へと流し、シーダーは自殺したと言う噂を広める。セッタクンマンがその計略を暴露する。
18. 初戦の結果、ラッファナスワンの武将四人が戦死する。パラムは冥界の王プラヤ・パッタルムに地下へ拉致されるが、フーラマンとその仲間三人によって救出される。ラッファナスワンは体を持双山の高さまで伸ばして、敵情を観察する。そのラッファナスワン目掛けて、パラムが矢を射る。

19. ラッファナスワンは十二アッコーペーニの軍隊を投入するが、妻ナン・スッドーと息子九人とを戦死させる。ラッファナスワンはパラムを狙って矢を射る。矢はパラムの足裏を傷付ける。フーラマンがカンタマット山（香酔山）の薬草と、牡牛ウスパラットの糞と、竜カラナクの枕とを持ってくる。セッタクンマンがそれを調合してパラムの傷を治す。
20. フーラマンが海底から取って来たケオヴァシラベットの矢を使ってラッファナスワンを射殺したパラムは、ピクピをランカーの王に立て、ナン・チャンターをその妃に、インタシを総督に任じる。三か月後インタパタナコンに戻ったパラムはそこで八アッコーペーニの軍隊を解散する。プラリチャンは一アッコーペーニの軍勢を率いてカシ王国に戻る。ナン・シーダー、ナン・ペーシー、バラク、フーラマン及び王子八人を伴ったパラムは、チャンタブリ・シサッタナクへ帰還する。帰途、タイ国内に八つの町が築かれ、八人の王子はそれぞれ支配者に任じられる。ニコット果を食べて人間の姿に変わったフーラマンは、ヴィエンチャン市場の徵税官に任命される。
21. ランカーから戻ったナン・シーダーは侍女達にせがまれてラッファナスワンの肖像を描く。その事でシーダーは死刑を宣告される。死刑執行を命ぜられたバラクは、犬の死骸を切って、彼女の処刑の証拠とする。
22. マニカップ馬の案内で養父の庵へと運ばれたナン・シーダーは、そこで1子プラブットを出産する。プラブットの留守中、聖者が木像を彫り、生命を吹き込む。創造された男子はプラフップと名付けられ、プラブットの弟として育てられる。
23. 父親に会いたいと子供達にせがまれたナン・シーダーは、子供達をヴィエンチャンに連れていく。三人は隣村の村長の家に泊まる。翌朝村長の娘二人がフマク・テン果を売りに出掛けるのを手伝ったプラブットは、徵税に来たフーラマンにフマク・テンを引き渡すのを拒否する。争いが起り、フーラマン、パラム、バラク、マニカップ馬などが巻き込まれるが、決着はつかない。最後に双方が身元を明かし合い、親子である事を知る。シーダーと子供二人はパラムの王宮に引き取られる。長い歳月の後、パラムはヴィエンチャン王国をプラブットとプラフップに譲り、ナン・シーダー、バラク、フーラマンを同伴して天界

へと赴く。

4. グヴァイ・ドヴォラビ (Gvay Dvorabhi)

「グヴァイ・ドヴォラビ」も、ラオスのラーマ物語である。ユアン語ユアン文字による貝葉としてルアンプラバンの王宮に保存されていた。日付は記されていない。グヴァイ・ドヴォラビとは「水牛のトーラピー」と言う意味である。その梗概は、次のようになっている。

1. 初劫の頃、カーシー国を大梵天タッパラメンスンが支配していた。タッパラメンスンには三人の子供ができた。三人の内、ダッタラッター（持国天）はカーシー国を、ヴィルンラカ（増長天）はランカー国を、ヴィルーパッカ（広目天）はクルラタナーガンをそれぞれ統治した。カーシー国王ダッタラッターには二人の息子バーリーとスギーブ及び娘ナン・カーシーラージャデータが生れた。ランカー国王ヴィルラッカには三人の子供ラーヴアナースン、ビグビー、インダージットが生れた。クルラタナーガン国王ヴィルーパッカには二人の子供プラ・ラーマ・ラージュとプラ・ラッカナとが生れた。ヴィルーパッカ王の死後はクルラタナーガン国をプラ・ラーマ・ラージャとプラ・ラッカナとが統治した。
2. ランカー王国のラーバナースンは人間の存在でありながら、神である私とそなたとを軽蔑したと、インドラ神がスジャーターに語る。立腹したスジャーターは、下界に降下しラーバナースンの膝の上に再生する。誕生したラーバナースンの娘を見に来た婆羅門や占星師達が、この娘は父親に害をもたらす。父親を死に至らしめる。筏に乗せて流すべきだと忠告する。ラーバナースンは、娘を金の手箱の中に密封して筏に乗せ海に流す。
3. 筏は、行者カッサパ・ラシーの沐浴場である閻浮提の海岸に漂着する。行者が手箱を開けてみると、中に小さな姫君がいて手で目を擦っている。行者は彼女にシーター（ラオ語で、シー=擦る、ター=目）と命名する。成長したシーターの美しさは、閻浮提全域に伝わる。諸国の王百一人がシーターに求婚する。行者は、インドラ神から授かった弓ササッサマータマ・ダヌを持ち上げ得た人

にナン・シーターを嫁がせると答える。クルラタナーガン国のブラ・ラーマ・ラージャが弓を持ち上げ、シーターを獲得する。

4. ラーバナーを殺すために下界に降下した筈なのに、ナン・スジャーターがまだ目的を達成していないため、インドラ神が金の鹿に化身して、ブラ・ラーマ、ブラ・ラッカナ、ナン・シーターの前を横切る。珍しい鹿の姿に、シーターはラーマに捕えてくれるよう頼む。鹿の後を追ったラーマが帰って来ない。ラッカナは、シーターを地母神の保護に託してラーマ搜索に向う。ラーマ、ラッカナの不在を千里眼で知ったラーバナーは、シーターを捕えランカードヴィップへ拉致する。
5. 金の鹿を見失った兄弟が元の場所に戻ってみると、シーターの姿がない。シーターを探している間に、二人は喉が渴く。弟が汲んで来た水を飲むと、汗臭い。人の涙である。流れを上流へと辿ると、スギーブが泣いている。訳を尋ねると、スギーブは次のように答える。我が国カーシーへ水牛のドヴォラーピーが現れた。何千何百という群を成している。水田は荒らされ、多数の住民が突き殺された。水牛征伐に出掛けた兄嫁ナン・カーシーラジャデータも、眼を角で突かれ全身血まみれになって倒れた。水牛が去った後、人々はカーシーラジャデータを町へ連れ帰った。彼女は流産しかかっていた。人々は胎児を引き摺り出した。母親が腰を折っていたため、嬰児の腰も曲っていた。人々はその子にオングット（曲った四肢）と命名した。嬰児の出産後、母親は息絶えた。
6. バーリーとスギーブの兄弟二人は、水牛退治に向った。生き残った水牛は、洞窟の中に潜んでいる。中に入る前、兄バーリは弟に言い残した。ここで待て。もし中から薄い血が流れ出たらそれは私の血だ。濁った血が流れ出てきたらそれは水牛のだ。薄い血を見掛けたら、お前は直ちに国へ帰りカーシー国を統治せよ。待機していると、薄い血が流れ出てきた。スギーブは言われた通り国へ帰りカーシーの王位に就いた。そこへ水牛を殺したバーリが帰ってきて、私は生きていたのにお前は私を見捨てた。お前は生かして置けぬと行って飛び掛かつて来た。スギーブはカーシー国を逃げ出し、こうして泣いていたのだと語る。
7. ナン・デヤクは魔の手の持主である。彼が踊りながら指差すと、指された人はその場で死ぬ。ダタラッタ王は、この魔物を退治したものに褒美を与えると

布告する。ナン・ガンダッピーが名乗り出る。彼女は魔物に近づいて言う。私が欲しければ私と一緒に踊りなさい。踊りながらガンダッピーは、自分の頭を指差す。魔物も彼女の真似をする。その瞬間、頭が碎けて魔物は死ぬ。

8. どのようにして魔物を死に至らしめたのかとダタラッタ王に尋ねられたナン・ガンダッピー（乾闌婆王の娘）は、王の面前で踊る。ガンダッピーの姿態を見て、ダタラッタは情欲を覚える。王の情欲は射精と言う形で外へ溢れ出る。ガンダッピーは溢れ出た精液を集め、視力を失ったオンゴットの母ナン・カーシーラジャデータに呑ませる。カーシーラジャデータは妊娠し、アイ・フォラマンを出産する。出産後一週間してカーシーラジャデータは息を引取るが、臨終の際彼女は子供に「完熟したイチジクを食べよ」と遺言を残す。昇る太陽を見て完熟イチジクと勘違いしたアイ・フォラマンは、太陽神が乗った車に手を掛け焼死する。太陽神は、残った血泡からフォラマンを蘇生させる。フォラマンは変幻自在の神通力を与えられる。

9. 猿のスギープは兄バーリーが統治しているカーシー国の境界に向う。他国への侵入者は原因の如何を問わず敵だと見做すのが、ラーマの見解である。バーリーを呼び出したスギープは、命令どおり忠実に行動した弟を一方的に追放するなんて片手落ちだ。領土を半分割譲するか、決闘で決着を付けるか二つに一つだと要求を突き付ける。兄弟を識別するため、ラーマは一枚の布を渡してスギープの頭に巻かせる。兄弟の決闘中、ラーマがバーリーを狙って矢を放つ。飛んで来た矢を手掴みにしたバーリーは、なぜ自分を射たのかとラーマに詰問する。スギープを追ったバーリーが我が領域を侵犯したからだとラーマは答え、命が惜しくば体を矢に掠らせよと忠告する。矢は名譽ある死を選んだバーリーの体を貫く。ラーマはスギープをカーシー国王に立てる。

10. スギープは三人の甥オンゴット、ヴァラーヨット、フォラマンをクルラタナガンへ向うブラ・ラーマ、ブラ・ラッカナ兄弟の護衛に付ける。閻浮提の諸王達が二人の下に参集し、ラーバナースンに誘拐されたシーターの奪回のため協力を申し出る。我が弟アイ・フォラマンなら一週間以内にシーターの居所を突き止める事ができるとオンゴットが言う。オンゴットとヴァラヨットは、カーシー国が水牛ドヴォラビーに荒らされた時その水牛と闘ったカーシーラージャ

データの遺児である。また、カーシーラージャデータがダッタラッタ王の精液を飲み込んで生まれたのが、フォラマンである。しかもフォラマンは、太陽神から命の水を掛けられて超能力を身に付けている。スギープが、我は汝の父の弟なり。汝は直ちにランカードヴィップに出掛けて国情を調べよ。ナン・シーターが見付かったら連れ帰れと指示する。ブラ・ラーマは証拠の品として自分の指環をフォラマンに託す。

11. ランカードヴィップへと跳躍したフォラマンは、力み過ぎて飛び越してしまう。到着地点で行者バラットターバイに会ったフォラマンは、庵で一泊する。翌朝池で洗面中、額にヒルが吸い付く。傷口から流れ出る血をタオルで拭ったフォラマンは、タオルを丸めてその上に座るが、その途端、超能力を喪失する。托鉢から戻った行者はフォラマンに米飯を食わせ、一週間たてば超能力が戻ると言語る。空中を飛翔できなくなったフォラマンは、馬に乗って一週間後ランカーに到着する。老人に扮したフォラマンは、米俵を運んでいる女二人がシーターの侍女である事を知って、シーターが幽閉されている庭園に入り込む。ラーマに託された指環を渡したフォラマンは、閻浮堤への脱出をシーターに申し出るが、誤解される事を恐れたシーターは提案を断る。私を救出するにはブラ・ラーマ自身が海を渡って救出に来るべきだ。ラーバナースンが私の釈放に同意しない場合には武力で私を救出せよと言うのが、シーターの伝言である。
12. シーターと別れたフォラマンは、ラーバナースンの宮殿に侵入する。ラーバナースンは睡眠中であった。ラーバナースンの頭髪を王妃の頭髪と結び会わせたフォラマンは、「妃が拳骨で王の頭を殴らない限り結び目は解けない」と扉に書き残す。目を覚ましたラーバナースンは止むなく妃に頭を殴らせるが、その瞬間神通力を失う。激怒したラーバナースンは、犯人搜索を命じる。一匹の子猿が捕らえられ、ラーバナースンの面前に引き立てられる。死刑を言い渡すが、どんな手段を用いても猿は死はない。油に浸した布で全身をくるみ、火を付ければ死ぬと教えられてその通りにする。点火されたフォラマンは、ランカー王城の上に駆け上がる。宮殿は焼け落ち、猿は海中に飛び込んでブラ・ラーマのもとへ帰る。
13. ラーマはシーター返還をラーバナースンに要求するため、使者オングットを

ランカードヴィップに派遣する。ラーバナースンは、ラーマが筏でランカーへ渡つて来れば返還してやると回答する。オンゴットの報告を聞いたラーマは、諸国の王を招集して軍隊を編成、七年七か月費やして筏を建造し、ランカーへ渡る。島に着いたラーマは、シーター返還を要求するためラーバナへの最後通告をヴァラヨットに持たせる。通告を受けとったラーバナーは、弟ビクビーに運勢を占わせる。結果は凶と出る。怒ったラーバナーは弟を追放する。ビクビーはブラ・ラーマの軍勢に加わる。

15. ランカーへ渡るための筏を建造中に、浮上して様子を見ていた海底の魚王国パンナールム（パッタルム）の王妃が、フォラマンの流した汗を飲み込んで妊娠する。生まれた男子はロットダイヤと呼ばれる。娘がフォラマンの汗のせいで私生児を孕まされた事に憤慨したパッタルムの王は、ラーマ殺害を決意する。パッタルムの王は、誘拐したラーマを蓮の茎の穴から地下へ連れ込み鉄の独房に閉じ込める。行方不明になったラーマの居所をビクビーが占う。地下にいることが判明し、フォラマンが蓮根の穴を通ってパッタルムに侵入する。老人に扮して侍女からラーマの居場所を聞き出したフォラマンは、蠅に化身して城中に入り、鉄の檻に閉じ込められていたラーマを救出する。パッタルムの王を殺したフォラマンは、魚の姫君が産んだ我が子ロットダイヤを新王に任命する。
16. ラーマに弓を受けられたブラ・ラックが、ラーバナースンに宣戦布告する。ラーバナースンはインダージットに戦闘を命じる。インダージットの投げた槍がブラ・ラックの肩に突き刺さるが、ブララックはインダージットを射殺す。
17. ラーマとラーバナーとの戦闘が始まる。ラーマ目掛けて放つラーバナーの矢は、全てバナナに変わってしまい、ラーマを傷つけない。ラーバナーは、ラーマが射る矢に当っても死がないし、首を切り落とされても死がない。切り落とされた首は直ぐに生え変わる。ラーマは、ビクビーに尋ねてその訳を知る。ラーバナーが金剛杵（ヴァジュラ）以外の武器では死がない。その金剛杵は海底に埋まっているが、超能力を持つ悪魔に守られて近付けない。どんな生き物でも悪魔が口を開けた途端口の中に吸い込まれてしまうからである。フォラマンが蠅に化身して、悪魔の口の中に飛び込む。歯の隙間から首の後へと回ったフォラマンは、首を圧迫する。苦痛の声を発してフォラマンに降参した悪魔は、矢

（金剛杵）をフォラマンに差し出す。フォラマンが持ち帰った矢を、ラーマは弓に番えて射る。ラーバナーは敢え無い最後を遂げる。

18. ピクビーをランカーの王に任命したラーマは、帰国途中弓に矢を番えて矢が落ちした地点に新都の建設を行なう事にする。ロップブリは吉日でなかったため放棄する。ピサヌロークからナコンサワンへと進んだラーマは、悪魔ナンディラートを弓で射て飢え死にさせた後ナンディラートが守護していた丘に新都を建設、アユディヤと名付ける。
19. ラーマがアユディヤ視察に出掛けた留守に、侍女一万六千人が集まり、ラーバナースンは美男子で神通力の持ち主だったと言うが、ナン・シーター以外に顔を見た者はいない。シーターに肖像画を描いてもらおうと衆議一決する。石板に肖像を描き終えた時、ラーマが帰城する。シーターは石板を玉座の下に隠す。ラーマが玉座に座ると「余の体に誰かが乗っている」と肖像画のラーバナーが口を利く。肖像画を探し出したラーマは、絵を描いたのがシーターである事を知ると「多くの犠牲を払って汝を救出したのに、汝は余以外の男を慕っているのか」と激怒し、シーターの処刑を命じる。
20. シーターが懷妊中である事を知っていたブラ・ラックは、人目に付かぬよう隠れ住む事をシーターに告げた後、インドラ神の化身である犬の死骸を切り、血塗られた剣を処刑の証拠としてラーマに見せる。行者デイッパーチャグの庵に辿り着いたシーターは、そこで一子を出産、バップトと命名する。シーターが果実を探しに出掛けた留守中に、行者がバップトの肖像を扉に描いて命を吹き込む。こうして創造されたバルックを、シーターはバップトの弟として育てる。
21. 成長した少年二人は、キュウリ売りの行商女に同行して都に上る。フォラマンの部下が市場へ徴税に来る。二人は納税を拒否する。怒ったフォラマンがキュウリを取り上げようとする。バップトがフォラマンのうなじを一撃すると、フォラマンの首の骨が折れる。報告を受けたラーマ王は少年二人に矢を射る。バップトも矢を射返す。射返す時バップトは、自分に矢を射かけた男が自分の父親であるならば矢は体を一周して戻ってくるようにと祈願して射る。矢はラーマを傷つけずに手元に戻ってくる。バップトはラーマの足元に跪き合掌礼拝する。

少年二人が実子である事を知ったラーマは、シーターを王妃としてアユディヤに迎え入れる。ラーマは王国を分割して二人を王位に付けた後、インドラディパッティの天界へと去る。シーターも天界でスジャーターすなわちインドラ神の妃として再生する。

まとめ

(1)『ラーマキエン』すなわちタイ語版ラーマーヤナの大きな特徴の一つは、ヴァーレルミーキの梵語版ラーマーヤナでは第7巻にあたるウッタラ・カーンダ（結びの巻）、就中羅刹トサカン（ラーヴァナ）とその一族の由来が物語の初めに叙述されている事である。トサカンが多聞天（クペーラン）と異母兄弟に当る事では両者同じ扱いだが、梵語版ではラーヴァナの前身が述べられていないのに対し、ラーマキエンではトサカンの前身は大自在天（プラ・イスアン）の門番ノントク（ナンダカ）だったとされる。また、トサカンの妻モントー（マンドーダリ）は、梵語版では魔神マーヤの娘だが、ラーマキエンでは行者4人によって美女に改造された蛙だったとされる。一方、マラヤのヒカヤット・スリ・ラーマ及びジャワのスラット・カンダではダシャラタ王妃バンドンダリの分身とされる。千年の修行を終えたラーヴァナが自分の頭を一つずつ火中に投げ十個目に達した時梵天に制止されて不可抗力を授かったと言う梵語版の「苦行と誓願」のモチーフは、ヒカヤット・スリ・ラーマには受け継がれているものの、ラーマキエンには見られない。猿王兄弟パーリ（ヴァーリン）とスクリーピ（スグリーヴァ）の起源について、梵語版では自由に変身できる不死身の生き物を創造して欲しいと言うサヤンブーの依頼によって、インドラ神が猿のヴァーリンを、日の神スリヤはスグリーヴァを、ブリハスパティ（木星）はタラクを、建築の神ヴィスヴァカルマはナラを、火の神アグニはニーラを、それぞれ創造したとされるが、ラーマキエンではコーダム王妃のカラ・アチャナと日の神プラ・アーティト（アーディトヤ）及びインドラ神との間に生まれた不倫の子だとされる。ハヌマンは、梵語版では風の神パヴァン（ヴァーユ）の息子だとされるが、ラーマキエンではコーダム王の娘で猿王パーリの異父姉妹であるサワーハの息子だとされる。梵語版では、ハヌ

マンは幼い頃に太陽を果物だと勘違いして飛び掛かりインドラ神に顎を碎かれる。風の神に抗議されたインドラがハヌマンに不死身を保証したと言うことになっているが、このエピソードはラーマキエンには受け継がれていない。シーターは、梵語版では畠の畠から生まれミティーラー國のジャナカ王に養女として育てられた事になっているが、東南アジアの諸版には「捨て子」モチーフが広く存在する。例えばジャワ版ではラーヴァナの妻マンドゥダキの娘として生れるが、将来父を殺すと予言されたため箱詰めにして海に流される。マラヤ版でもラーヴァナの妻であるマンドゥダーキの娘として生れるが、不幸をもたらすと占われて鉄の函に入れて流される。同じようにタイ版でもトサカンの妻マントーの娘として生れるが、トサカン一族を破滅させると占われ壺に入れて川に流される。この「捨て子」モチーフは梵語版には存在しない。もっともシーターの前身について梵語版では、ヒマラヤの森で苦行を実践中のヴェダヴァティーがラーヴァナに執拗に口説かれ憤怒の余り火中に飛び込んで命を絶った。その後ラーヴァナ懲罰のためシーターとして再生したとされる。シーターの前身については東南アジア諸版でもほぼ共通している。シーターは、ジャワ版ではヴィシュヌの妃シュリ、タイ版ではラクシュミの権化だとされる。

以下、ラーマキエンに見られる特徴を列挙すると、次のようになる。

1. 弓の競技に訪れたラーマは、ヴァールミーキーの梵語版では競技前にシーターと出会う事はないが、ラーマキエンでは二人は一目惚れする。
2. 梵語版ではラーヴァナの妹シュールパナカーは独身で、夫も子供もいないが、ラーマキエンではサマンナカには夫チウハ（ジヴハ）がいる。チウハは、トサカンの留守中、舌を長く伸ばしてランカー城を警護していたが、誤ってトサカンに切り殺される。シュールパナカーの夫が舌を切断されて死ぬエピソードは、ジャワ版、マラヤ版にもある。
なお、タイ版ではサマンナカーの息子クンバカートはラーマの弟プラ・ラックによって天与の剣で斬り殺される。
3. パーリ・スクリープ兄弟の決闘中、両者の識別はスクリープの右手首に白い布を結び付けて行なう。
4. マラヤ版では、ラーヴァナの息子バダヤはその顔を見た者全てが一瞬の内に

灰に成ってしまう恐ろしい存在だが、戦場でハヌマンの照らす鏡に己の顔を写し出され燃焼してしまう。タイ版では、ピヤコンの子センアチットがそれで照らせば皆死ぬと言う恐怖の眼鏡をオンコットに騙し取られる。

5. タイ版では地下の帝王マイヤラーブが猿軍兵士を眠らせラーマを地下に拉致する。この冥界の王による地底への誘拐モチーフは、マラヤ版にも見られるが、梵語版には存在しない。
6. タイ版、マラヤ版では、ランカー城中に侵入したハヌマンが、睡眠中のトサカンとモントーとの頭髪を結び合わせる。
7. タイ版ではランカーへの架橋工事を巡ってハヌマンとマハーチョンプーとの間に対立が生じるが、梵語版には存在しない。
8. タイ版では、ランカー攻撃の直前、使節としてトサカンの下へ派遣されたオンコットが尾を丸めてトサカンの玉座と同じ高さにしてその上に座る。このエピソードも梵語版には存在しない。
9. タイ版では、ピペークの娘ベンヤカーアイがシーターの死体に化けてラーマの軍營に漂着するものの、薪を用意したハヌマンに生きた儘茶毘に付されそうになり露見するが、このエピソードも梵語版には見られない。
10. タイ版ではハヌマンが犬の死骸に化けてクンバカルナの供儀を妨害するが、この話も梵語版には存在しない。
11. ランカーでの戦闘ではクンバカルナとインドラジットとの出陣が梵語版とタイ版とでは逆の順になっている。
12. 行者ゴープトラが預かっているトサカンの魂をハヌマンとオンコットが騙し取ってトサカンを死に追いやる場面も、梵語版にはない。
13. タイ版では、サマンナカの娘アドゥンがラーマとシーターとを引離すためシーターにトサカンの肖像を描かせるが、この場面も梵語版には存在しない。
14. 梵語版では、シーターはヴァールミーキの庵で双生児を出産するが、タイ版では一子モンクットを出産、行者がスレートにモンクットの肖像を描いて生命を吹き込みロープを創造する。この嬰児創造モチーフはマラヤ版にも存在する。
15. 梵語版ではシーターは地下に消え去り二度と現れないが、タイ版では一旦地下に消え去ったシーターが自在天の説得でラーマと和解する事になっている。

(2) 『リアムケー』すなわちクメール語版ラーマーヤナの構成は、ヴァールミーキーの梵語版のそれと基本的に一致している。ジャワ版、マラヤ版、タイ版に見られる新規エピソードや新規モチーフは、リアムケーには殆ど存在しない。只字細に検討すると、それなりの特色はリアムケーにもある事が窺える。それらを箇条書きにすると次のようになる。

1. 梵語版では、シーターはジャナカ王が土地を耕していた時に大地から出てきたとされるが、リアムケーでは始耕祭の時筏の上の蓮華の中から発見されたとする。「捨て子」のモチーフはリアムケーには見られない。
2. カイケーイー妃によるダジャラタ王へのラーマ王子の追放とバラタ王子への王位継承の要求は、梵語版では妃に仕えるせむし（ハンチバック）の侍女マンタラーの通報によるが、せむしの侍女はクメール版には登場しない。
3. ダンダカの森でラーマ、ラクシュマナ兄弟を見初めて口説いたシュールパナカーはラクシュマナに切り付けられて逃走するが、この時切り落とされたのは梵語版では耳と鼻であるのに対し、クメール版では両腕と頭髪が切り落とされた事になっている。また、梵語版では体を傷付けられたシュールパナカーが兄カラの下へ逃げ込み復讐を求めるが、クメール版ではシュールパナカーの悲鳴を聞いたカラとドゥース（ドゥーシャナ）が報復に駆け付ける事になっている。
4. クメール版ではラーヴァナに誘拐される途中出会ったシラサギにシーターが自分の苦境をラーマに伝えるよう伝言するが、梵語版にはその様な場面はない。
5. シーター誘拐を阻止せんとしてラーヴァナに挑戦するジャターユスは、梵語版では鳥の王ハゲタカだが、クメール版では迦楼羅（ガルーダ）となっている。またジャターユスは梵語版ではラーヴァナに翼を切り裂かれて墜落するが、クメール版ではシーターが指にはめていたシヴァ神の指環をラーヴァナが抜き取りジャターユス目掛けて投げ付け翼を切断する事になっている。
6. ラーマ、ラクシュマナと猿王スグリーヴァとの出会いは、梵語版ではラーマ、ラクシュマナの二人をヴァーリン側の斥候ではないかと警戒したスグリーヴァが二人の身元を確認するためハヌマンを派遣しハヌマンの機転で知り合う事になっているが、クメール版では兄弟二人がマンゴーの樹下で休憩した時太陽が静止したため不審に思ったスグリーヴァがハヌマンを派遣する。

7. 猿兄弟バーリー、スグリープの決闘の際両者を識別するため、クメール版ではスグリープに花輪を被せるが、梵語版では何の識別もしない。因みにタイ版ではスグリープの右手首に白い布を巻き付いて識別する。
 8. シーターの所在を確かめるためランカー城に潜入したハヌマンは、クメール版では熟睡中のラーヴァナとマンドーダリとの頭髪を結び合わせて解けないようにするが、梵語版にはそのような場面は存在しない。
 9. 梵語版ではシーターの操について民衆の間で交わされる噂を耳にしたラーマがラクシュマナに命じてシーターを捨てさせるが、クメール版ではラーヴァナ一族のアートゥルの要求でラーヴァナの肖像を描いたシーターがラーマに肖像画を発見され追放される事になっている。
 10. 梵語版では、シーターはヴァールミーキ仙の庵で双生児クシャとラヴァを出産するが、クメール版では先に一子ラームラクスンを生み、後で行者ヴァジプリットがジャプラクスンを創造する。このレプリカ（クローン人間）創造モチーフは、マラヤ版、タイ版、ラオス版にもある。
 11. 梵語版ではヴァールミーキの弟子となった双生児がラーマーヤナを朗詠してラーマとの親子関係が判明するが、クメール版ではラームラクスン、ジャプラクスン兄弟とラーマとの間で一旦戦闘が行なわれた後二人の身元が判明する。
- (3) ラオス版ラーマーヤナの一つ『パラク・パラム』(Phra Lak Phra Ram)には、三つの大きな特徴がある。その一つは、タイのラーマキエン同様、ラッファナスワン（ラーヴァナ）の由来が物語の冒頭で述べられている事である。梵語版の結びの巻（ウッタラ・カーンダ）でのラーヴァナはブラフマー神の孫で毘沙門天（クヴェーラ）とは異母兄弟になるが、パラク・パラムでのラーヴァナ（ラッファナスワン）はその前身が大梵天（マハーブロム）で、インタパタナコンのヴィルラハ王（増長天）の子に生れ変わる。ラッファナスワンはケオヴァラベットの矢を除きいかなる武器に対しても不死身ではあるが、「苦行と誓願」のモチーフは、タイ版同様、パラク・パラムにも見られない。ラッファナスワンとして再生する以前に肢体不自由児タオ・ルンルとして下界に降下した経験を持つ点は、タイ版とは異なる。また、ラッファナスワンは、ヴァールミーキーの魔王ラーヴァナとは異なり十頭の持主ではない。帝釈天のような美男子である。

パラク・パラムの第二の特徴は、四天王が兄弟同志になっている事と物語に登場する主要人物が全員親戚関係にある事の二点である。まず、カーシー王のタッパラメンスンにはヴィルラハ（増長天）、ダッタラッタ（持国天）という二人の子供がいるが、ヴィルラハにはラッファナスワン、ピクピー、インタシーの3人、タッタラッタにはナン・チャンター、パラク、パラムの3人が、それぞれ生れる。したがって、ラッファナスワン（ラーヴァナ）とパラム（ラーマ）とは従兄弟同志ということになる。また、ラッファナスワンが妻に迎えたナン・チャンターはタッタラッタの娘で、パラク、パラムの姉に当たるから、ラッファナスワンはパラム（ラーマ）の義兄という間柄にもなる。更に、パラムはラッファナスワン、ナン・スッドー夫妻の娘ナン・シーダーと結婚しているから、パラムとラッファナスワンとは女婿と義父（舅）という間柄になる。ハヌマン（フーラマン）は、パラムが一時期猿になった時同じように猿に化身させられていたナン・ベンシー（ヴァーリン、スグリーヴァの異父姉）との間に設けた子供なので、パラムとハヌマンとは親子、パラムとヴァーリン、スグリーヴァとは義理の兄弟という間柄になる。また、フーラマンと共に活躍する猿のタオクアン・タオファは猿王ヴァーリン（サンキップ）の妻ナン・コッタラットとパラムとの間に生れた子供なので、タオクアン・タオファとフーラマンとは異母兄弟という事になる。以上のように、パラク・パラムの主要登場人物相互の関係は極めて錯綜しているが、相互に何らかの血縁関係にある事が、他の東南アジア版ラーマ物語とは異なる。それが、パラク・パラム最大の特徴だと言ってよい。

パラク・パラムの第三の特徴は、仏教教理の導入である。インタパタナコンの王子として生れたラッファナスワンの前身は、百姓クン・ナルオンの家に生まれた不具者タオ・ルンルであった。そのタオ・ルンルに同情した帝釈天が、1から8までの数字で現わされた謎々を尋ねる。タオ・ルンルの回答は、一仏、二法、三受、四諦、五戒、六識、七菩提、八正道であった。これらは仏教教理の中核を成す概念で、次のような意味を持つ。1は唯一無二の存在としての仏陀（Buddha）、2の二法は色法（Rūpadhamma）と名法（Nāmadhamma）、3の三受は、苦受（Dukhāvedanā）、樂受（Sukhāvedanā）、業受（Kammavedana）、4の四諦は、苦諦（Dukhasacca）、集諦（Samudayasacca）、滅諦（Nirodhasacca）、道諦

(Maggasacca), 5 の五戒 (Pañcasīla) は不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒、6 の六識 (Cha Viññāna Kāyā) は眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、7 の七菩提 (Satta Bojjhangā) は念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨、8 の八聖道 (Ariyo Atthagiko Maggo) は正見、正思、正語、正業、正命、正勤、正念を、それぞれ現わす。

パラク・パラムのその他の特徴を箇条書きにすると、次のようになる。

1. 誕生直後父親に遺棄されたシーターを養女として育てたのはジャナカ王ではなく、聖者である。
2. 弓を持ち上げる事ができなかったラッファナスワンが連れ帰った女性はシーター本人ではなく、聖者が創造したシーターのレプリカ（クローン人間）ナン・スッドーである。
3. パラク・パラムには、カイケーイ妃によるバラタ王子の即位要求とラーマ王子の森への追放は存在しない。
4. 鹿に変身してラーマを誘い出すのは、梵語版ではマリーチャ、タイ版ではマリート、クメール版ではカーカナスールの子マハーリクだが、マラヤ版（ヒカヤット・スリ・ラーマ）では2匹の羅刹が金の鹿、銀の鹿に変身する。それに対し、パラク・パラムではラッファナスワン自身が金の鹿を創り出す。その点、ラオス版は、マラハージャ自身が金の鹿に変身するマラヤのマックスウェル・ウインステッド版やマハーラディア・ラワナが金色の角を持つ鹿に変身するフィリピン版に似ている。
5. シーターは怒ると体が熱くなる。そのため、ラッファナスワンがシーターを拉致する際、シーターを石像に変えてしまう。
6. パラムは、ニコット果を食べたせいで一時猿に変る。ラーマの猿変身モチーフはジャワ版、マラヤ版にもあるが、そこでは透明な池での沐浴が変身の原因になっている。
7. バーリーとスグリープとを識別するため、タイ版ではスクリープの右手首に白い布を結び付け、クメール版では頭に花輪を被せるのに対し、パラク・パラムではスグリープの頭に布を巻く。
8. 梵語版ではシーターの所在確認にランカーへ派遣されるのはハヌマン唯一人

だが、パラク・パラムでインタパタナコンに派遣されるのはタオクアン・タオファとフーラマンの二人であり、ランカーの王城を焼き払うのも二人である。

9. マラヤ版のブルガ・シンガは、ランカー王城の警護中に誤ってラーワナに舌を切られて不慮の死を遂げる。同様に、タイ版のチウハ（ジヴハ）もランカー城の警護中に熟睡し、伸ばしていた舌をトサカンに切られて死ぬ。パラク・パラムもクン・ジブハが舌を切り落とされるが、王城の警護中ではなく、ランカーに向かう海中で舌を長く伸ばして橋のように見せ掛けていた時にタオクアン・タオファ等に切られる。
10. 東南アジアのラーマ物語にはシーター自殺の噂を流してシーターの臍死体をラーマ達に見せる場面があるが、タイ版ではトサカンの命令によってピペークの娘ベンヤーカイが死体に化けるのに対し、パラク・パラムではラッファナスワンの武将プラヤチャンがバナナの幹をシーターの死体に見せ掛けれる。
11. 東南アジアのラーマ物語にはラーマが地下に拉致される場面が共通してあるが、マラヤ版ではパタラ・マハーラヤンによる連行、タイ版ではマイヤラーブによる拉致であるのに対し、パラク・パラムでは冥界の王プラヤ・パッタルムによる拉致である。いずれの場合も、蓮の茎の穴を通り抜けての連行がその特徴になっている。
12. ランカー城に潜入したハヌマンがラーヴァナとマンドーダリとの頭髪を結び会わせて、マンドーダリがラーヴァナの頭を殴らない限り解けないという呪いをかけるエピソードは、タイ版、クメール版、マラヤ版等と同じである。
13. 梵語版のハヌマンは最後まで猿姿のままだが、パラク・パラムの猿フーラマンは最後にニコット果を食べて人間の姿に変わる。この猿から人間への変身(Metamorphosis) モチーフは、マックスウェルとウインステッドによって報告されたマラヤのヒカーヤット・スリ・ラーマ（クラクチル）やフィリピンのマハーラディア・ラワナ（ラクサマナ）にも見られる。
14. シーターがラッファナスワン（ラーヴァナ）の肖像を描いてラーマから追放されるエピソードは、ジャワ版（デウェイ・ゴタクジュがシンタの扇に描き寝台の上に置く）、マラヤ版（キケウイ・デーウィの要請で扇に描く）、タイ版（夜叉アトゥンの要請でスレートに描く）、クメール版（ラーヴァナの親類アドウ

ンの要請で描く) のように、東南アジアのラーマの物語には広く見られる。

15. ラーマに追放されたシーターが行者の庵で生む子供は、梵語版ではクシャとラヴァの双生児であるが、ジャワ版、マラヤ版、クメール版、タイ版、ラオス版ではいずれも一児のみで、後に行者がその子をモデルにレプリカ(クローン人間)を創造する事になっている。
16. 馬のマニカップは、ビルマではニュウンヤン時代の作家パデーターヤーザーの作品『戯曲・紅玉の眼』に「紅玉の眼をもつ馬」として登場する。原典はパンニヤーサ・ジャータカ (Pannyasa Jataka) の第二十話サッタダヌ本生である。

(4) 『グヴァイ・ドヴォラビ』すなわちもう一つのラオス版ラーマ物語の登場人物は、その名称の面でパラク・パラムとは若干の違いがある。最大の特徴は、パラク・パラム同様、ランカー王国のラーバナスンの由来が冒頭説明されている事である。また、四天王が兄弟になっている事、登場人物が血縁関係にあることは、パラク・パラム版に類似している。グヴァイ・ドヴォラビ版では、カーシー国の梵天タッパラメンスンに3人の子供ダッタラッタ(持国天)、ヴィルンラカ(増長天)、ヴィルパッカ(広目天)ができる。ダッタラッタにはバーリー、スギープ、ナン・カーシの3人が、ヴィルンラカにはラーヴァナスン、ビクビー、インダジットの3人が、ヴィルパッカにはプラ・ラーマ、プラ・ラッカナの二人が、それぞれ生れる。したがって、ラーマとラーヴァナ、バーリー、スギープといった主要人物は、いずれも従兄弟同志という間柄になっている。

その他の特徴を列挙すると、次のようになる。

1. シーターの前身はインドラ神の妃スジャーターで、ラーヴァナスンの娘として生れるが、父親に害をもたらすと占われ金の手箱に密封して海に流される(捨て子モチーフ)。
2. 金の鹿に変身するのは、ラーヴァナースンでもラーヴァナスンの配下でもなく、インドラ神である。
3. 梵語版ではバーリーとターラーとの子アンガダ(オンゴット)は、タイ版では実の父はバーリーだがトッサカンの妻マントーを母として生れる。クメール版でもラーバナの妻マンドーギリの腹に身籠もる。グヴァイ・ドヴォラビでは

水牛ドヴォラビと戦ったバーリーの妻ナン・カーシーラージャデータの子供として生まれる。但し、ナン・カーシーラージャデータはバーリーの妹だからオシコットは兄妹による近親相姦 (Incest) の結果生れたという事になる。

4. グヴァイ・ドヴォラビ版には指差された人がその場で即死するという魔の指の持主ナン・デヤクが登場するが、魔の指の持主はタイ版ではトサカンの前身ノントクである。
5. 猿のフォラマンはオンゴットの母ナン・カーシーラージャデータの子供だが、実の父はダッタラッタ王である。従ってフォラマンも父娘による近親相姦の結果生れた子供ということになる。
6. バーリーとスギープ両者の決闘では、兄と弟をスギープの頭に巻いた布で識別する。
7. ランカーに侵入したフォラマンがラーヴァナスン夫妻の頭髪を結び会わせるエピソードは、パラク・パラム版と同じである。
8. 梵語版ではランカー島に渡るため橋を架けるが、グヴァイ・ドヴォラビ版では筏で渡る。
9. ラーマの地底への拉致は地下の王パッタルムによって行われるが、パラク・パラム版同様、蓮の茎の穴を通って連行される。
10. 侍女の要望でシーターがラーバナースンの肖像を描いたのは石盤である。シーターはその石盤を玉座の下に隠すが、ラーマが玉座に座ると石盤の肖像が口を利き、シーターの手で描かれた事が露見する。
11. シーターは行者の庵で一児バプットを出産、行者がレプリカ (クローン人間) のバルックを創造する。レプリカ創造モチーフを含有している点では、パラク・パラム版と変りない。

参考文献

1. King Rama I of Siam : *Ramayana, Masterpiece of Thai Literature retold from the original version with illustration from the stone rubbings of Wat Poh*. Bangkok 1905 reprint 1977.

2. Swami Satyananda Puri and Charoen Sarahiran : *The Ramakirti (Ramakien) or the Thai Version of the Ramayana*. Bangkok 1949.
3. Cadet, J. M : *Ramakien, the Thai Epic, illustrated with bas-reliefs of Wat Phra Jetubon, Bangkok*. Palo Alto Calif. 1970.
4. The Government Lottery Office : *The Ramakien (Ramayana) Mural Paintings along the Galleries of the Temple of the Emerald Buddha*. Bangkok 1981.
5. Christian Velder : *Der Kampf der Götter und Dämonen*. Stuttgart-Fellbach 1962.
6. Bofman, Theodore Helene : *The Poetics of the Ramakien*. Bangkok 1978
7. Santosh N. Desai : *Hinduism in Thai Life*. Bombay 1980.
8. Matics, Kathleen : *A History of Wat Phra Chetupon and its Buddha Images*. Bangkok 1979.
9. Dhani Nivat : *The Ramakien, a Siamese Version of the Story of Rama*. BRSFAP I 1960.
10. Dhani Nivat : *The Shadow-play as a possible origin of the Masked-play*. JSS 37 1949.
11. Dhani Nivat : *Hide Figures of the Ramakien*. JSS 53 1965.
12. Singaravelu, S : *A comparative study of the Sanskrit, Tamil, Thai and Malay versions of the story of Rama with special reference to the process of acculturation in the Southeast Asian versions*. JSS 56 1968.
13. Singaravelu, S : *The Rama Story in the Thai Cultural Tradition*. JSS 70 1982.
14. Christian Velder : *Notes on the Saga of Rama in Thailand*. JSS 56 1968.
15. Boeles, J. J : *A Ramayana Relief from the Khmer sanctuary at Pimai in Northeast Thailand*. JSS 57-i 1969.
16. Schweiguth, P : *Étude sur la Littérature Siamoise*. Paris 1951.
17. Saveros Pou : *Rāmakerti (XVI-XVII siècles) traduit et commenté*.

- EFEO Paris 1977.
18. Saveros Pou : *Études sur le Rāmakerti (XVI-XVII siècles)*. EFEO Paris 1977.
 19. Judith M. Jacob : *Reamker (Ramakerti), the Cambodian version of the Ramayana*. London
 20. Francois Martini : *Note sur l'empreinte du Bouddhisme dans la version cambodgienne du Ramayana*. Journale Asiatique 1952.
 21. Martini, F : *En Marge du Ramayana cambodgien*. BEFEO 38 1938.
 22. Vo Thu Tinh : *Phra Lak Phra Lam, version Lao du Ramayana indien et les fresques murales du Vat Oup Moung*, Vientiane. Vientiane 1972.
 23. Sachchidanand Sahai : *The Phra Lak Phra Lam or the Phra Lam Sadok, a Lao version of the Story of Rama*. New Delhi 1973.
 24. Sachchidanand Sahai : *Ramayana in Laos, a study in the Gvāy Dvorahbī*. Delhi 1976.
 25. Henri Deydier : *les origines et la naissance du Rāvana dans le Rāmā yana Laotien*. BEFEO 44 1951.
 26. Prince Dhani ; *The Rama Jataka, a Lao version of the Story of Rama*. JSS 36 1946.
 27. Raghavan V : *The Ramayana Tradition in Asia*. New Delhi 1980.
 28. K. R. Srinivasa Iyengar : *Asian Varations in Ramayana*. New Delhi 1983.

Rāmāyana Legends prevailed in Southeast Asia (2)

OHNO Toru

In this chapter, the author intends to introduce several peculiarities found in the vernacular versions of Ramayana from Thai, Cambodia and Laos.

It is possible to say that one of the most distinguished features of the Ramakien is that the Ramayana of Thai commences with the Uttara-Kanda, the origin of Thosakan (Dasakantha or Ravana) and his families in particular, which is the Last Book of the Sanskrit Rāmāyana composed by Vālmīki. The Ramakien deals with Thosakan as a half-brother of Kuperan (Kubera) in the same manner like that of Vālmīki's Rāmāyana. Thosakan is described, in the Ramakien, to have been Phra Isuan's gate-keeper named Nonthok (Nandaka) in his previous life. Thosakan's wife, Mantho (Mandodari) is said to have been a female frog and created into a beautiful maiden by four sages to whom she had warned a danger with her own death. As to the origin of Phali (Valin) and Sukhrip (Sugriva), the Ramakien states that they are adulterous sons born of Kāla Acanā, King Khodam's wife, and Phra In (Indra) and also Phra Athit (Aditya). They become monkeys as the result of a curse made by King Khodam. Hanuman is born of Sawaha (Svaha), king Khodam's daughter, who remained standing on one leg and opening her mouth as a punishment for revealing her mother's infidelity. Sita is regarded, in the Ramakien, to be the reincarnation of Laksmi, Phra Narai's consort, and born as a daughter of Montho and Thosakan. She is considered to be inauspicious for her

father and put in an urn and thrown into the sea.

It is pointed out that the following accounts are the prominent features of the Ramakien.

1. Before the archery contest, Prince Rama and Sita notice each other and fall in love, as found in Tamil version of Kamban.
2. Sammanakha (Surpanakha), Thosakan's sister, has both husband and a son. Her son Kumphakat is unintentionally killed by Lakshmana. Her husband Jivha is ordered by Thosakan to guard the Langka Palace during Thosakan's absence and killed accidentally by Thosakan when Jivha guards the palace with his lengthened tongue.
3. Rama ties a piece of white cloth around the right wrist of Sukhrip for the purpose of distinguishing Sukhrip from Phali during their duel.
4. Sang Aditya has a miraculous glass which burns everything when it reflects. Ongkot (Angada) disguises himself as Sang Aditya's subordinate and flies to the Brahma in order to defraud him of the glass.
5. Maiyarab, the King of the Nether World (Patal) has a magic powder with which he can induce everyone sleep. He succeeds to hypnotize Simian army and abducts Rama to his underground kingdom in order to boil him alive next day. Hanuman goes down through a hollow of a lotus stalk to the region of Patal and rescues Rama after killing Maiyarab.
6. During his stay in Langka, Hanuman ties up Thosakan's hairs with those of his wife Montho. The knot can not be untied until Montho strikes on Thosakan's head three times.
7. By order of Thosakan, Benyakay, Phiphek's daughter, assumes Sita's form pretending dead and floats in the waters near Rama's camp. Hanuman lifts up the sham corpse, places it upon a burning pyre and exposes her trickery finally.
8. When Ongkot is sent to Thosakan's palace as Rama's emissary, he

- lengthens his tail and rolls it up until it reaches as high as Thosakan's throne.
9. When Kumphakan, Thosakan's younger brother, performs a sacrifice with the intention of evoking a magical power of his spear Mokkhasakti, Hanuman assumes the shape of a dog carcass, while Ongkot becomes a crow and disturbs Kumphakan's ceremony.
 10. Phiphek, another brother of Thosakan, tells Rama that Thosakan's soul had been taken out of his body and kept in a receptacle of which his preceptor Khobutacan takes charge. Hanuman and Ongkot go to Khobutacan and defraud him of the receptacle. When Rama looses Brahmastra from his bow aiming at Thosakan, Hanuman crushes the receptacle containing Thosakan's soul.
 11. Adun, a daughter of Sammanakha, assumes the form of the palace maid, urges Sita to draw Thosakan's portrait on a slate. Rama finds the slate under the bed, gets furious and orders Laksamana to take Sita away and put her to death.
 12. Sita takes shelter in the hermitage of sage Wachamarik (Vajmriga) and gives birth to a son to whom she gives a name Monkut. The sage creates another baby named Loph (Lova) by drawing a figure of Monkut on a slate. In Vālmīki's Rāmāyana, Sita gave birth to twin sons.

It is interesting to note that the general composition and order of arrangement of Reamker, Khmer Ramayana, are almost identical with those of Valmiki's Ramayana. It is significant, however, that the Reamker text edited by l'Institut Bouddhique de Phnompenh is composed of 16 fascicules numbering from part 1 to 10 and part 75 to 80. The former portion comprised from part 1 to 10 begins with the account of Ram (Rama)'s contribution toward his preceptor, the ascetic Bisvamitr, by destroying a demon Kakanasur in the form of crow and results in the

account of Rab (Ravana)'s decision to request his friend Mulaphalam outside of Cakraval to give military assistance to him. The latter portion comprised from part 75 to 80 commences with the account of Sita's banishment of Ram for drawing a portrait of Rab in compliance with a request from a demoness Atul and ends with the description of Sita's descending down to the Underworld with the intention of separation from Ram. It draws our attention to the fact that the events from part 11 to 74 are missing in Reamker-Ramayana. The missing portion seems to be plenty so far as the part numbers are concerned. It is possible and probable that the missing portion is composed of the final combats between Ram and Rab and Rab's death. What concerns us here is the fact that the space devoting to these accounts is by no means enormous. As a matter of course, it may be instructive to consider that the earlier composition and the later composition are derived from different origins respectively.

The following facts are the main features found in the Khmer Ramayana.

1. Sita is discovered from the inside of a lotus flower during the royal ceremony of ploughing carried out by Janaka, King of Mithila.
2. When a demoness Surapanakha assumes the form of a beautiful woman and seduces Ram persistently, Laksm cuts off her hands and shaves her head. In Vālmīki's Rāmāyana, Laksmana deforms Surpanakha by cutting off her ears and nose.
3. Laksm makes a garland for Sugrib for the purpose of distinguishing monkey brothers in their duel. This episode can not be found in the Vālmīki's Rāmāyana.
4. Hanuman ties up Rab's hairs with those of Mandogiri. This episode is found likewise in Thai version of Ramakien.
5. A she-demon Atul assuming a human form persuades Sita to draw a

picture of Rab. Ram becomes angry and gives an order to put her to death. This episode is quite similar to that of Thai Ramakien.

6. Sita gives birth to a son in the hermitage of a sage Vajjaprit. The baby is named Ram-Laksm. Since the hermit finds the child disappeared during his meditation, he creates another child named Japp-Laksm. This episode is also found extensively among the vernacular versions of Malay, Thai and Laos.

There are two different versions of Ramayana in Laos. One is Phra Lak Phra Lam and another Gvay Dvorahbi. The former found in the region of Vientiane is popularly known as Phra Lak Phra Lam or Phra Lam Sadok meaning Rama Jataka. It is found that the origin and genealogy of Raphphanasuan (Ravana) is mentioned at the beginning in Phra Lak Phra Lam. The fact that the previous life of Raphphanasuan is dealt with at the outset of the legend denotes a certain connection with the Thai version of Ramayana. Another striking feature of Phra Lak Phra Lam is the fact that the main figures like Phra Lak, Phra Lam, Raphphanasuan, Phikphi and Inthasi (Indrajit) are described as first cousins each other. The former state of Raphphanasuan was a Maha Phrom (Maha Brahma) in the Akanitta Heaven from where he descends on the earth and is born as a son of Inthapathanakhon's King Virulaha. It is however the second time of incarnation for him since the Maha Phrom had been born as a deformed son named Thao Lun Lu into a farmer's family in the outskirts of Inthapathanakhon previously. On the other hand, Phra Lak (Laksmana) and Phra Lam (Rama) are born as the sons of King Thattarattha. It is noteworthy that both the King Virulaha of Inthapathanakhon and the King Thattarattha of the Chantanaburi Sisattanak are sons of Tapparamensuan, the second generation of the founder of Inthapathanakhon. Phra Lam marries with Nang Sida, who was born of Raphphanasuan and his wife Nang Chanta. Since Nang Chanta is an elder

sister of Phra Lam, Raphphanasuan and Nang Chantha are related each other at the first cousin, and Phra Lam and Nang Sida are connected with each other as an uncle and a niece. Conjugal relationship of both couples may be explained as consanguineous marriage. It is observed however that a cross-cousin marriage is strictly prohibited among the Lao community.

The following facts can be pointed out as the prominent features of Phra Lak Phra Lam.

1. Hullaman (Hanuman) is born of Nang Phengsi, a daughter of King of Kasi, and Phra Lam. Nang Phensi and Phra Lam turned into monkeys after eating Nikhot fruit. The metamorphosis motif can be seen among the vernacular versions of Java and Malay.
2. Raphphanasuan transforms himself as a golden deer in an attempt to entice Phra Lam and Phra Lak away.
3. Two monkeys, Thao Khuan Thao Fa and Hullaman are sent to Langka in search of Nang Sida. No description regarding Thao Khuan Thao Fa can be found in *Vālmīki's Rāmāyana*.
4. Hullaman and Thao Khuan Thao Fa sever Khun Sivha's tongue which he had stretched to form a bridge in order to trap Phra Lam's army. The Thai version of *Ramakien* deals with Jivha as a devoted guardian of Langka palace where he covered with his stretched tongue and severed by mistake by Thosakan.
5. Phraya Chan, Raphphanasuan's general, transforms a banana trunk into the dead body of Nang Sida and floats it towards Phra Lam's camp with a rumour of Sida's suicide.
6. Phraya Pattalum, King of the Underworld, abducts Phra Lam whom Hullaman rescues through a hole of a lotus stalk. This episode is broadly prevalent in Southeast Asian region.
7. The episode that Hullaman ties up Raphphanasuan's hairs with those of Nang Sudho is also widely known among the vernacular versions

of Southeast Asia.

8. The metamorphosis motif is comparatively wide spread in Southeast Asia. This may be explained in Phra Lak Phra Lam by the fact that Hullaman turns finally into a man after eating Nikhot fruit.
9. In Phra Lak Phra Lam, too, Nang Sida is banished by Rama for having drawn a portrait of Raphphanasuan. It is not mentioned at all in Vālmīki's Sanskrit version.
10. Nang Sida gives birth to a son named Phra But in the hermitage of her foster father. The sage makes a wooden image of him and gives life to the image. The motif of creating the second child is broadly prevalent in southeast Asian region. This child is named Phra Hup in Phra Lak Phra Lam.

Another version of Laos Ramayana is known under the title of Gvay Dvorahbi meaning Water Buffalo Thoraphi. It is said that the original palm leaf manuscript of Gvay Dvorahbi is written in the Yuan script and preserved in the Royal Palace, Luang Prabang. It is interesting to note that the Gvay Dvorahbi commences, like Phra Lak Phra Lam and Ramakien, with the genealogies of the chief figures such as Rabahnasvn (Ravana), Bikbi, Bari, Sugip, Blahmahraj and Rakkhanahah. Another noteworthy fact draws our attention to their relationships. Three from the Catur-Maharajas of Buddhist texts, namely Dattahratthah, Vilunlahhah and Viruppakkhah are sons of King Tappahramensvn who descended from the heaven in order to be a man on the ground. The eldest son, Dattaratthah, has three children, Bali, Sugip and Nang Kasi. Another son Virunlahhah of Langka Kingdom has three sons: Rabahnasvn (Ravana), Bikbi (Vibhisana) and Indahjik (Indrajit). The youngest son, Viruppakkha has two sons: Blammahraj and Rakkhanahah. It is therefore evident that the main figures of Gvay Dvorahbi are cousins each other like those in Phra Lak Phra Lam. The Catur-Maharajas call our attention to the fact

that they are regarded to guard the four cardinal directions and govern four kinds of demi-gods and demons like Gandharva (East), Kumbhanda (South), Naga (West) and Yaksa (North) in the Buddhist cosmology.

The following facts should be taken into consideration as the main features of Gvay Dvorahbi.

1. The previous state of Nang Sita was Nang Sujata who was the first of four billions and five million maids in waiting for Lord In. Sujata reincarnates herself on the lap of King Rabahnasvn. She is considered to cause king's death. Therefore she is placed in a golden casket, put on a raft and casted adrift on the ocean. When a hermit Kassahparahsi opened the casket and found a small princess in it, she was the positure of raising her hands to rub (Si) her eyes (Ta). She was named Nang Sita. Though it is not described in Vālmīki's version, the motif of Sita's foundling is widely found in vernacular versions of Southeast Asia.
2. The God In transforms himself into a golden deer in order to expedite Sita to annihilate Rabahnasvn.
3. Nandiyak had a poisonous hand, with which he pointed at anybody, that person died at once. Nandiyak immitated dancing of Nang Gandahbi and died by pointing her own fingers at her head.
4. Onggot and Hvolahman are born from the semens of King Dattahratthah.
5. When Hvolahman sees the Sun emerging from the summit of the mountain, he jumps at the Sun God's chariot considering it as a ripe fig and dries up.
6. Sita draws a portrait of Rabahnasvn on a stone slab at the request of palace maidens. She is condemned to death by Phra Lam.
7. Sita gives birth to a son named Bah Put. The hermit draws a portrait of Bah Put on a door panel and animates it. The second child thus created is named Bah Rup.